

倉吉市内遺跡分布調査報告書20

平成30年度
倉吉市教育委員会

序

この報告書は、平成29年及び平成30年度に、倉吉市内における開発事業に伴って事前に実施した試掘・確認調査の記録です。

鳥取県の中央部に位置する倉吉市は、豊かな自然の風土の中で育まれた数多くの文化財が今日まで伝えられており、なかでも埋蔵文化財は県内でも有数な包蔵地として知られているところです。倉吉市教育委員会では、こうした埋蔵文化財を守り、開発事業との共存を図るため、各関係機関との協議を重ね、さらには地元の方々の御理解と御協力を得ながら、文化財保護行政を進めています。

今回実施した調査においても、遺跡の有無とその広がりや遺跡の性格を把握するという所期の目的を果たし、開発機関との調整を図りながら文化財の保存を講ずることができました。発掘調査の記録をここに報告し、埋蔵文化財行政の資料として、また調査研究の一資料としてご活用いただければ幸いに存じます。

最後に、調査にご協力いただきました市民の方々をはじめ、関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成31年3月

倉吉市教育委員会
教育長 小 椋 博 幸

例 言

1 本報告書は、平成29年及び30年度に倉吉市教育委員会が、国・県の補助を受けて実施した分布調査の記録である。分布調査では、トレンチ・グリップによって遺跡の有無・範囲・性格を調査した。

2 調査体制は次のような組織・編成である。

調査主体 倉吉市教育委員会

事務局 倉吉市教育委員会事務局文化財課

福井伸一郎（教育長 29年度）

小 椋 博 幸（教育長 30年度）

山 中 敏 幸（事務局長）

長谷川智郁（文化財課課長 29年度）

根鈴智津子（文化財課主査 29年度／文化財課課長 30年度）

山 口 迅 矢（文化財課課長補佐兼文化財係係長） 岡 本 智 則（文化財係主幹）

加 藤 誠 司（文化財係主任 30年度）

箕 田 拓 郎（文化財係主任）

小 田 芳 弘（文化財係学芸員兼博物館学芸員 29年度／文化財係学芸員 30年度）

片 岡 啓 介（文化財係学芸員）

出口 垂 美（文化財係主事 30年度）

岩 田 歩（文化財係主事）

細井万希子（調査補助員）

猪口亜也子（臨時職員）

松 原 雄 二（非常勤職員）

内務整理 秋元葉子・足羽由里香・進本和美（30年度）・田中章子・田中朋子（30年度）・中尾あゆみ（29年度）・花池 亨（30年度）

3 本書の執筆は、調査員が討議して、各担当調査員が行ない、文末に文責を記した。

4 遺物の実測は小田、片岡、岩田が行なった。

5 本書に掲載した地図は、平成元年及び8年修正測量の1:2,500国土基本図倉吉市平面図を使用し、方位は国土座標第Ⅴ座標系（日本測地系）で示した。

6 調査によって得られた資料は倉吉市教育委員会で保管している。

7 塑像・貿易陶磁器・金属加工関連遺物・瓦質土器の観察において以下の諸氏にご指導をいただいた。記して謝意を表します。（順不同・敬称略）

山崎隆之（愛知県立芸術大学名誉教授）、松田誠一郎（東京藝術大学教授）、中原 斉（鳥取県埋蔵文化財センター所長・当時）、李 恩硯（韓国国立海洋文化財研究所）、黄 仁鎭（韓国国立江華文化財研究所）、田 庸昊（韓国国立羅州文化財研究所）、山本信夫（早稲田大学理工学術院客員主任研究員）、中森 祥（鳥取県教育委員会文化財課）、坂本嘉和（鳥取県埋蔵文化財センター）、橋本久和（元高槻市教育委員会）

目 次

1	大御堂廃寺跡（松ヶ坪地区）発掘調査	2
2	駄経寺町2丁目地区（大御堂廃寺跡（松ヶ坪地区））	18
3	東岩倉町地区（旧倉吉町遺跡群）（平成28・29年度）	30
4	東岩倉町地区（旧倉吉町遺跡群）（平成30年度）	34
5	下福田地区（下福田後口野遺跡）	36
6	大谷茶屋地区	38
7	国府地区（両長谷遺跡）	40
8	石塚地区	44
9	国分寺地区（国分寺宮ノ峰遺跡）	46
10	河原町地区（旧倉吉町遺跡群）	48
11	大谷地区（中尾遺跡）	52
12	小鴨地区（小鴨道祖神遺跡）	54

1 大御堂廃寺跡（松ヶ坪地区）発掘調査

調査地点 倉吉市駄経寺町2丁目11-1
調査期間 平成29年4月12日～5月29日
調査契機 個人住宅建築
調査面積 75m²
調査概要

調査地は国指定史跡 大御堂廃寺跡と市道を挟んで南側に隣接し、東面回廊推定地の南へ延長した線上に位置する。縄文時代晩期の松ヶ坪遺跡に含まれるため、松ヶ坪遺跡第2次発掘調査として調査を行なったが、縄文時代の遺構は確認できなかったため、大御堂廃寺跡（松ヶ坪地区）として報告する。

調査地の西側では昭和49（1974）年度に松ヶ坪遺跡第1次発掘調査が行なわれている¹⁾。今回の発掘調査に先立って、平成28（2016）年度に本調査地での試掘調査が行なわれ²⁾、隣接地でも26（2014）年度、29（2017）年度に試掘調査が行なわれている³⁾。

調査地の基本層序は、上から造成土、灰色粘質土（1層、旧耕土）、灰黄色粘質土（2層、旧床土）、灰色粘質土（3層、奈良時代～中世の遺物包含層）、灰黄褐色砂混じり粘質土（4層、大御堂廃寺整地層）、灰色砂質土（5層、縄文時代の遺物包含層）、中粒砂（6層、無遺物層）、灰白色細粒砂（7層、無遺物層）である。このうち、3層は瓦を主体とする多量の遺物を含み、5層は少量ながら縄文土器を含む。遺構外から出土した遺物は、調査地を北西区・北東区・南区に分けて取り上げた。

以下、調査の概要を述べる。

（1）遺構

1号土壇 調査地の中央付近、4層より掘り込まれ、5層上面で検出した。平面プランは隅丸長方形であり、長さ2.26m、幅1.69m、検出面からの深さ0.26mを測る。底面より0.16mの高さで、南北0.6m以上、東西1.1mの範囲に多量の炭粒が集中し、さらに外側を灰白色シルトが取り囲む状況を確認した。遺物は、丸瓦（13）、平瓦とわずかに縄文土器の小片が埋土中より出土した。

（2）遺物

瓦類、縄文土器、弥生土器、須恵器、丹塗り土器、土師質土器、瓦質土器、陶磁器、土鍾、鉄釘、銅銭（北宋銭）、埴塼、輪羽口、銅滓、鉄滓、埴壁、磚、砥石、敲石、塑像、埴伝などが出土した。以下、大御堂廃寺に関連する遺物を中心に報告する。型式分類は特に記載がない場合は『大御堂廃寺跡発掘調査報告書』⁴⁾に従う。なお、量量の（ ）は復元値、[]は残存値である。

瓦類（第4～6図、図版15～16頁）

軒丸瓦（1～10） 小片を含めて計33点出土。うち、型式のわかるものは17点あり、Ⅴ類が5点、Ⅲ類・Ⅳ類が各3点、Ⅵ類が2点、Ⅰ類・Ⅱ類a・Ⅱ類b・Ⅲ類bが各1点である。詳細は第1表に示す。

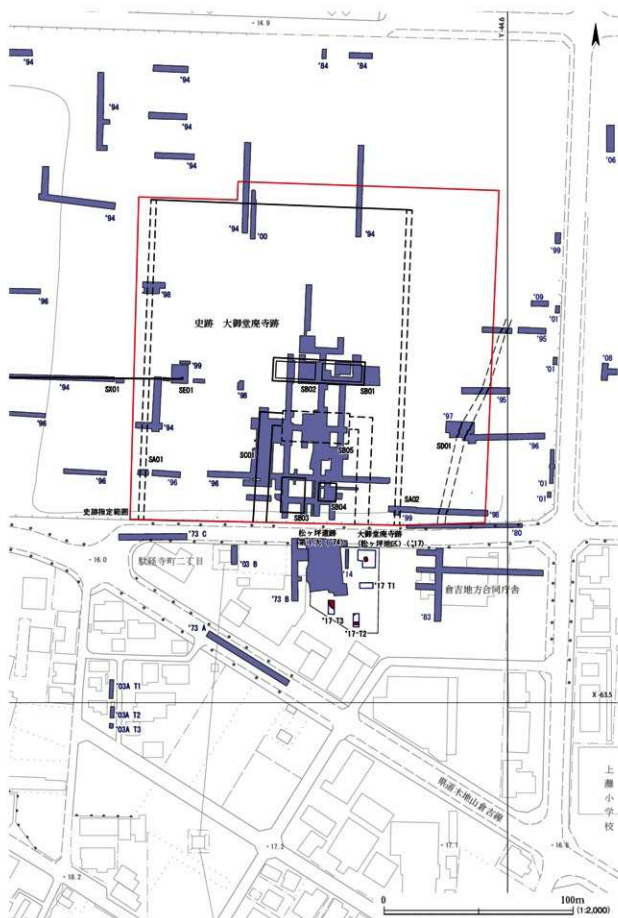
鴟尾（11・12） いずれもⅠ類（山陰系鴟尾）である。11は胴部下方の縦帯または鰭部下方の一部で、12は向かって右側面の胴部下方の縦帯と鰭部の接点と考えられる。厚さは2.9～3.1cm。調整は11が内外面をナデ、12が外面を平行タタキ後ナデ、内面を同心円タタキ後ナデ。いずれも胎土は緻密で、4mm以下の白色粒・黒色粒を含む。焼成は硬質で、色調は外面が褐灰～黄灰色、内面が灰白色。南区3層出土。

丸瓦・平瓦（13～18） 瓦類は59コンテナ分出土したが、大部分が遺物包含層からの出土であり、破片が多い。北東区南寄り3層で遺存度の高い丸瓦・平瓦がまとまって出土したため、これらを中心に図化した。詳細は第2表に示す。

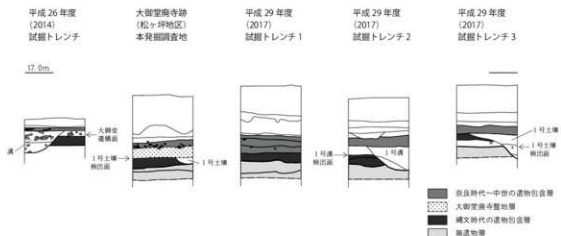
土器類（第7図、図版16頁）

土師質土器（19） 坏または皿の底部。底径4.5cm、器高[1.4]cm。調整は外面をヨコナデ、底部を回転糸切り、内面をナデ。胎土は密で、0.5～2mmの砂粒を多く含む。焼成良好。色調は外面がにぶい黄褐～黒褐色、内面が黒褐色。南区3層出土。

瓦質土器挿鉢（20） 口縁部～体部1/8以下。器高[2.5]cm。調整は外面口縁部をヨコナデ、体部をタテハケ、内面をヨコハケ後掃目。胎土は密で、0.5mm程の砂粒をわずかに含む。焼成良好。



第1図 調査地位位置図



第2図 柱状図

色調は内外面が黒色（炭素吸着）、断面が灰白色。北東区北壁沿い3層出土。

青磁碗（21） 鎗蓮弁文碗の底部付近の小片。胎土は緻密で灰白色を呈し、0.1mm以下の黒色粒を含む。軸の厚みは1mm以下で、色調はやや青みを帯びた緑色。南区3層出土。大宰府陶磁器編年⁵¹の龍泉窯系青磁碗ⅡB類（13世紀前後～前半）に比定される。

磁器皿（22） 白磁または青白磁皿の口縁部の小片。胎土は緻密で白色を呈し、0.1mm以下の黒色粒を含む。軸の厚みは0.2mmで、色調は水色を帯びた白色で透明。貫入が入る。口縁端部は軸が掻き取られ橙色味を呈す。南区3層出土。白磁であれば、大宰府陶磁器編年の白磁皿XⅠ類（10世紀後半～11世紀中頃）に比定される。

土製品（第7図、図版16頁）

土錘（23～25） 3点出土。直径0.9cm、孔径0.3～0.4cmを測る。詳細は第3表に示す。

金属製品（第7図、図版16頁）

鉄釘（F1） 釘頭は遺存しない。釘身は屈曲し、長さ[6.7]cm、断面は0.6cm×0.5cmの方形を呈する。南区1層出土。

金属片（M1） 長さ[2.4]cm、幅2.1cm、厚さ0.1cmの薄い板状の金属片。南区3層出土。

銅銭（B1～B5） 7枚がまとまって出土したが、うち3枚は錆着がひどく分離できなかった。残り4枚については錆による腐食により銭名の判読が困難であったが、元符通寶2枚と政和通寶、

淳化元寶と考えられる。詳細は第4表に示す。

金属加工関連遺物（第7図、図版16頁）

輪羽口 小片が少なくとも4点出土。うち2点は表面に赤色の珪酸質が付着する。

銅滓（26～29） 4点出土。いずれも緑青に覆われる。26は50g、27は30g、28は21g、29は12g。26は北東区3層、27は北西区北壁沿い3層、28・29は北西区3層出土。

炉壁片・埴塼片 炉壁もしくは埴塼と考えられる破片が287kg出土している。

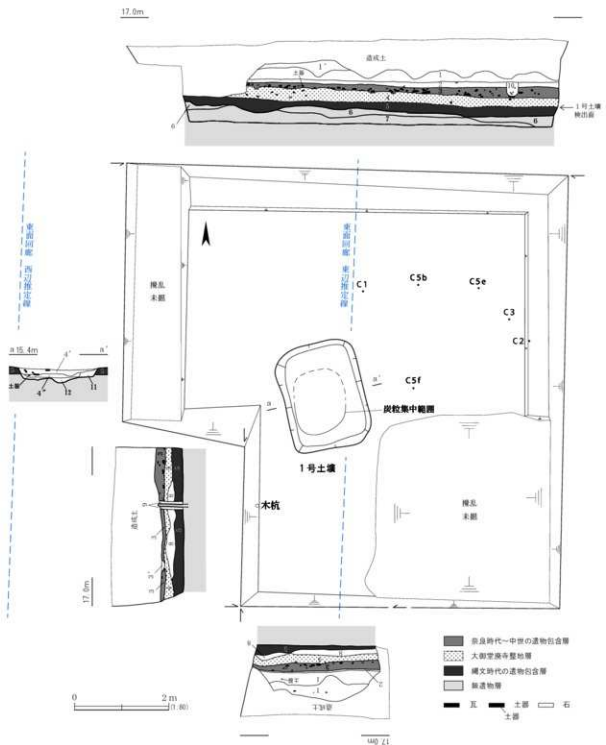
石製品（第7図、図版16頁）

砥石（S1） 流紋岩製。長さ[8.8]cm、幅[5.5]cm、厚さ[6.7]cm。砥面は1面。被熱により赤変する部分がみられる。北東区北壁沿い3層出土。

磚（S2・3） 白色凝灰岩製。S2は長さ[6.8]cm、幅[7.0]cm、厚さ3.5cm。北東区3層出土。S3は長さ[9.7]cm、幅[4.9]cm、厚さ[1.8]cm。被熱により表面が赤色や黒色に変色している。南区3層出土。

埴塼・塑像（第8図、図版17頁）

方形三尊埴塼（C1） 方形の埴面に椅坐する中尊と、その左右に立像の脇侍を配する方形三尊埴塼の断片であり、左脇侍の上半と中尊の一部が遺存する。左脇侍の面部には削り取られたような痕跡がみられる。高さ[6.2]cm、幅[7.4]cm、厚さ1.7cm。胎土は緻密。焼成は良好。色調は黒褐～暗灰褐色を呈する。北東区3層出土。なお、平成10（1998）年度の大御堂庵寺跡第3次発掘調査で西面回廊（S



第3図 遺構図

C01)の遺物包含層から出土した方形三尊埴(6)と接合した。

如来像螺髻(C2~C4) 3点出土。いずれも円錐形、巻き方向は左で、巻き数が4つのもの(C2)と5つのもの(C3)がある。C2は被熱により表面が荒れ、部分的にスポンジ状となる。底面は平らで孔なし。底径0.85cm、最大径1.25cm、高さ1.8cm。胎土は緻密。色調は上半が灰褐色、下半が被熱により橙色を呈する。北東区3層出土。C3は先端部をやや欠く。表面が磨滅し、仕上土が部分的に残る。底面は平らで孔なし。底径0.9cm、最大径1.4cm、高さ[2.35]cm。胎土は緻密。色調は灰色で、仕上土は黄橙色を呈する。北東区3層出土。C4は底部を欠損する。巻き数は3以上。最大径[1.4]cm、高さ[1.7]cm。胎土は緻密。色調は灰白~灰色。排土採集。

菩薩像面部(C5) 菩薩像の髻、地髪、左眉毛、左下脛、左耳、鼻、口が遺存する。地髪部には段がつき、段より下では長髪を梳るさま、上では毛筋が表現される⁶⁾。左耳は写實的に表現され、口はおちよは口である。面部高8.7cm、髮際高約70cmの立像に復元できる⁷⁾。胎土は緻密。色調は灰白~褐灰色。髻と地髪は被熱により赤褐色を呈する顔料が付着する。C5a~fは北東区3層出土。C5gは平成26(2014)年度の試掘調査で遺物包含層から出土。

天部像衣文(C6) 鎧の袍の裾と、^{くさ}裙と考えられる。高さ[5.5]cm、幅[4.8]cm、厚さ2.25cm。被熱により表面は須恵質となる。胎土は緻密。色調は灰白~灰色。南区3層出土。

衣文断片(C7) 衣文の一部と考えられる。高さ[13.5]cm、幅[8.4]cm、厚さ[3.45]cm。被熱により表面が荒れている。胎土は緻密で、裏面には藁スサの痕跡がみられる。色調は赤黒色で、部分的に赤褐色を呈する。北西区3層出土。

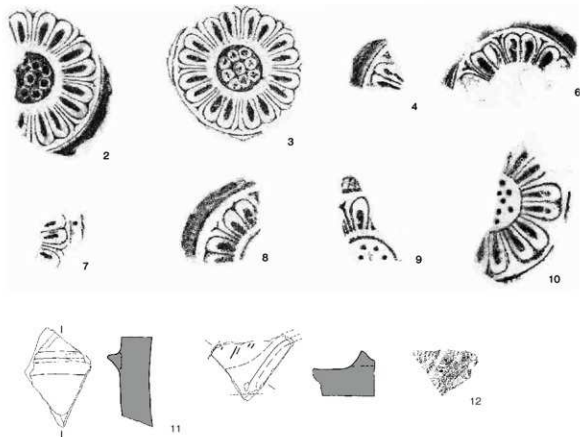
(3) まとめ

今回の調査地は東面回廊推定地から南へ延長した地点であったが、中心伽藍に關係する遺構は確認できなかった。検出した遺構は隅丸長方形の土

壇1基で、遺構の規模・形状と、包含層より銅滓や輪羽口、灰壁、埴塼といった金属加工に関わる遺物が出土していることから、铸造土壇の可能性が考えられる⁸⁾。土層断面や出土遺物の観察から、大御堂廃寺の時期の遺構と想定される。

また、顕著な出土遺物として菩薩像面部(C5)を含む塑像が挙げられる。大御堂廃寺跡周辺における塑像面部の出土は、平成14(2003)年度の試掘調査⁹⁾に次いで2例目である。菩薩像は髮際高約70cmに復元でき、金堂に安置する像としては小さいことから、塔安置の可能性が指摘される¹⁰⁾。一方、螺髻(C2~4)は等身大(もしくは半丈六)の如来像のものと復元できる¹¹⁾。平成11(1999)年度の大御堂廃寺跡第4次調査では溜櫓(SE01)調査区より丈六仏にみあう大きさの螺髻の范型が出土している。金堂にこの丈六の如来像が安置されたとすると、C2~4を伴う如来像は塔安置の可能性¹²⁾がある。よって、大御堂廃寺の塔内には如来像や菩薩像が安置されていたと想定される。(小田)

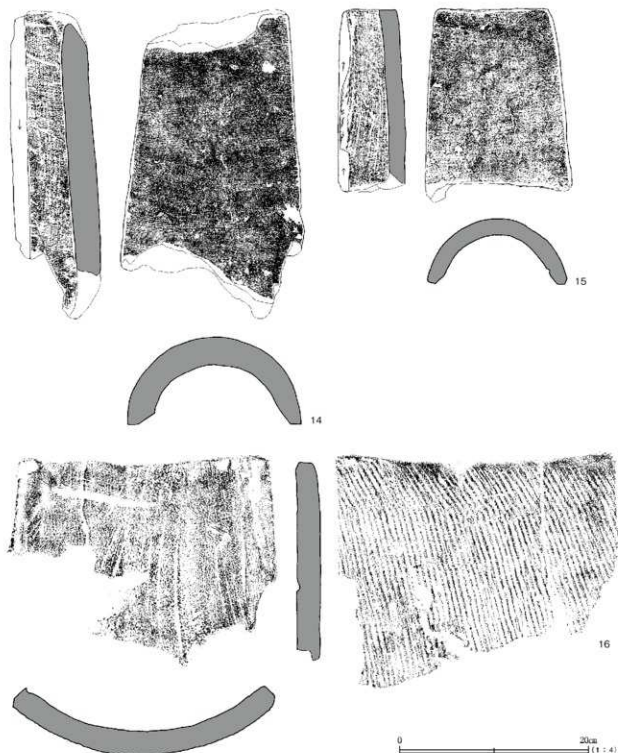
- 1) 森下哲哉「松ヶ坪遺跡」『新島取県史 考古1 旧石器・縄文・弥生時代』鳥取県 2017
- 2) 箕田拓郎「13 駄経寺町2丁目地区(松ヶ坪遺跡)」『倉吉市内遺跡分布調査報告書19』倉吉市教育委員会 2017
- 3) 岡平拓也「11 駄経寺町2丁目地区(松ヶ坪遺跡)」『倉吉市内遺跡分布調査報告書18』倉吉市教育委員会 2015
- 4) 倉吉市教育委員会編「史跡大御堂廃寺跡発掘調査報告書」2001
- 5) 太宰府市教育委員会編「大宰府条坊跡XV 一陶磁器分類編一」太宰府市の文化財第49集 2000
- 6) 西村公朝「仏像の再発見-鑑定への道」吉川弘文館 1976
- 7) 山崎隆之氏・松田誠一郎氏によるご教示。
- 8) 坂本嘉和氏によるご教示。
- 9) 加藤誠司・岡平拓也「10 駄経寺町2丁目A・B地区(大御堂廃寺跡関連遺跡)」『倉吉市内遺跡分布調査報告書13』倉吉市教育委員会 2005
- 10) 山崎隆之氏・松田誠一郎氏によるご教示。
- 11) 亀田修一・亀田素穂子「塑像螺髻に関する覚書」『網干善教先生古稀記念考古学論集』1998
- 12) 山崎隆之氏・松田誠一郎氏によるご教示。



第1表 軒丸瓦一覧表

No.	形式	瓦当径 (mm)	瓦当厚 (mm)	形制・手法	胎土・釉薬・色調・透光度	出土位置	備考
1	1型	128		外縁は高1cmの直線状で、	胎土中硬質、2.5mm以下の白粉質、 白粉質が白く、釉薬は薄く、透 光度は低い。透光度は約1.005。	東区3号	
2	2型	124	13	胎土中硬質、直線は高1cm で、内縁は直線、瓦当 縁部は直線状で、瓦当 縁部の内縁は直線状で、	胎土中硬質、2.5mm以下の白粉質が 白く、釉薬は薄く、透光度は約 1.005。	東区3号	大丸(2)に 1.5cmの ワイドが ある。
3	3型	126	13.5	胎土中硬質、直線は高1cm で、内縁は直線、瓦当 縁部は直線状で、瓦当 縁部の内縁は直線状で、	胎土中硬質、2.5mm以下の白粉質が 白く、釉薬は薄く、透光度は約 1.005。	東区3号	大丸(2)に 1.5cmの ワイドが ある。
4	4型	128	13.5	胎土中硬質、直線は高1cm で、内縁は直線、瓦当 縁部は直線状で、瓦当 縁部の内縁は直線状で、	胎土中硬質、2.5mm以下の白粉質が 白く、釉薬は薄く、透光度は約 1.005。	東区3号	
5	5型	127	13.5	胎土中硬質、直線は高1cm で、内縁は直線、瓦当 縁部は直線状で、瓦当 縁部の内縁は直線状で、	胎土中硬質、2.5mm以下の白粉質が 白く、釉薬は薄く、透光度は約 1.005。	東区3号	
6	6型	130		胎土中硬質、直線は高1cm で、内縁は直線、瓦当 縁部は直線状で、瓦当 縁部の内縁は直線状で、	胎土中硬質、2.5mm以下の白粉質が 白く、釉薬は薄く、透光度は約 1.005。	東区3号	
7	7型	124	13.5	胎土中硬質、直線は高1cm で、内縁は直線、瓦当 縁部は直線状で、瓦当 縁部の内縁は直線状で、	胎土中硬質、2.5mm以下の白粉質が 白く、釉薬は薄く、透光度は約 1.005。	東区3号	
8	8型	126	13.5	胎土中硬質、直線は高1cm で、内縁は直線、瓦当 縁部は直線状で、瓦当 縁部の内縁は直線状で、	胎土中硬質、2.5mm以下の白粉質が 白く、釉薬は薄く、透光度は約 1.005。	東区3号	
9	9型	124		胎土中硬質、直線は高1cm で、内縁は直線、瓦当 縁部は直線状で、瓦当 縁部の内縁は直線状で、	胎土中硬質、2.5mm以下の白粉質が 白く、釉薬は薄く、透光度は約 1.005。	東区3号	
10	10型	126		胎土中硬質、直線は高1cm で、内縁は直線、瓦当 縁部は直線状で、瓦当 縁部の内縁は直線状で、	胎土中硬質、2.5mm以下の白粉質が 白く、釉薬は薄く、透光度は約 1.005。	東区3号	

第4図 出土遺物(軒丸瓦・鷗尾・丸瓦)



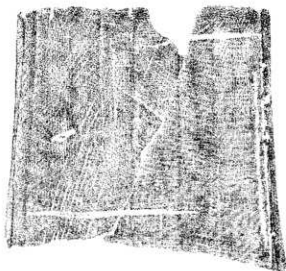
第5図 出土遺物（丸瓦・平瓦）

第2表 丸瓦・平瓦一覧表

No.	品名	寸法 (mm)		厚さ	形状		出土・発見・位置	出土・発見	備考
		長さ	幅		正面	背面			
13	丸瓦	201	137	1.0	破損した丸瓦。破損面を縦に1.5cmのキズあり。左端部を縦に2cmのキズあり。	ナシ。破損面を縦に2cmのキズあり。	出土層で、1～2cmの白い粉状物を付。破損面中央部。色調は内面が白色で、外面が灰色。	丸瓦瓦（2）と同一。色調・形状が同一。	
14	丸瓦	20.0	117	1.0	丸瓦。破損面を縦に1.5cmのキズあり。	ナシ。破損面を縦に0.5cmのキズあり。	出土層で、1～2cmの白い粉状物を付。1.5cm以下の破損あり。破損面中央部。色調は白色。	丸瓦瓦（2）と同一。色調・形状が同一。	
15	丸瓦	20.0	119	1.0	丸瓦。破損した丸瓦。破損面を縦に2cmのキズあり。	縦に1cmの破損のキズありのキズあり。	出土層で、1～2cmの白い粉状物を付。破損面中央部。色調は白色。	丸瓦瓦（2）と同一。色調・形状が同一。	
16	平瓦	20.0	200	1.0	平瓦。破損した平瓦の破損面。破損面を縦に1cmのキズあり。	平行ナシ。破損面を縦に1cmのキズあり。	出土層で、1～2cmの白い粉状物を付。破損面中央部。色調は白色。	丸瓦瓦（2）と同一。色調・形状が同一。	
17	平瓦	41.0	20.0	1.0	平瓦。破損した平瓦の破損面。破損面を縦に1cmのキズあり。左端部を縦に1cmのキズあり。破損面を縦に1cmのキズあり。	平行ナシ。破損面を縦に1cmのキズあり。左端部を縦に1cmのキズあり。破損面を縦に1cmのキズあり。	出土層で、1～2cmの白い粉状物を付。破損面中央部。色調は白色。	丸瓦瓦（2）と同一。色調・形状が同一。	
18	平瓦	20.0	119	1.0	平瓦。破損した平瓦の破損面。破損面を縦に1cmのキズあり。	平行ナシ。破損面を縦に1cmのキズあり。	出土層で、1～2cmの白い粉状物を付。破損面中央部。色調は白色。	丸瓦瓦（2）と同一。色調・形状が同一。	



17

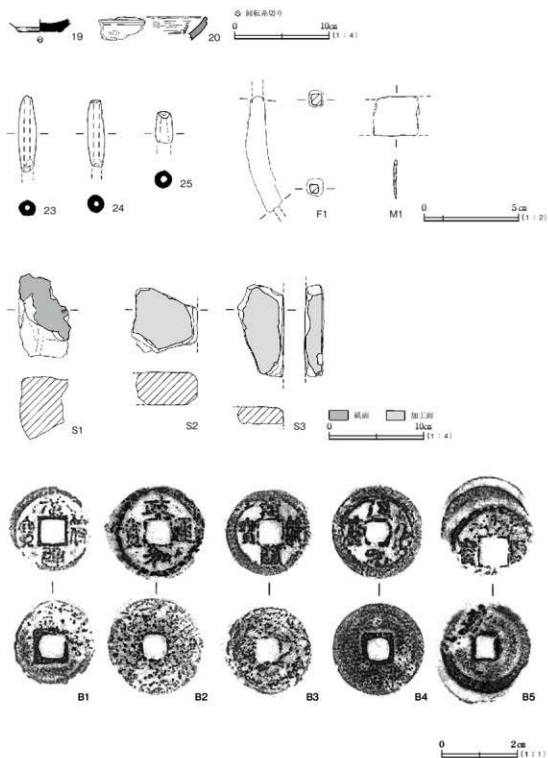


18



0 20cm (1:4)

第6図 出土遺物 (平瓦)



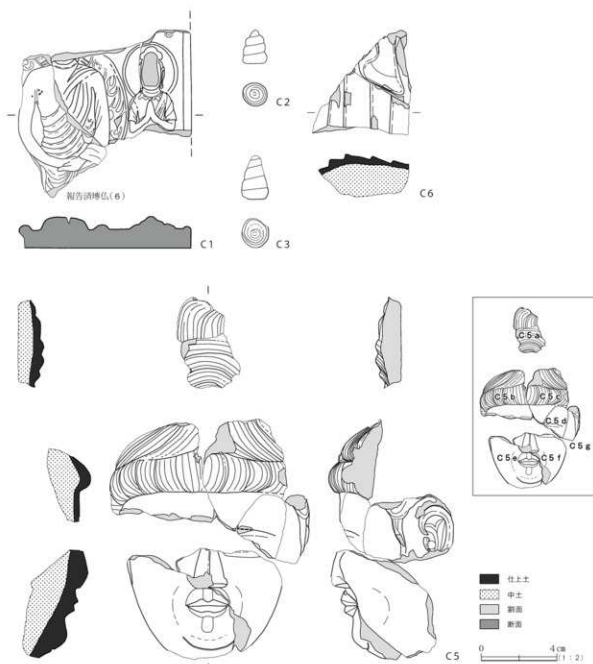
第7図 出土遺物（土器・土錘・金属製品・砥石・碑）

第3表 土錘一覧表

No.	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	遺存状況	出土位置
23	14.0	49	0.3	欠損	北西区東部3層
24	13.5	49	0.3	欠損	北西区北部付近3層
25	11.7	49	0.4	欠損	南區3層

第4表 銅銭一覧表

No.	遺物名	書体	国名	材料	重量 (g)	直径 (cm)	内径 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)	出土位置
B1	元世通寶	篆書	北宋	銅	1.85	2.20	1.85	0.16	1.85	北西区3層
B2	政和通寶	分書	北宋	銅	2.00	2.20	1.85	0.15	2.00	北西区3層
B3	元世通寶	篆書	北宋	銅	2.32	2.20	1.85	0.16	2.32	北西区3層
B4	淳化元寶	行書	北宋	銅	2.49	2.20	1.85	0.16	2.49	北西区3層
B5	不明（3枚組）	—	—	—	—	—	—	—	6.11	北西区3層



第8図 出土遺物 (埴仏・塑像)



調査地と史跡大御堂廃寺跡（南東から）



調査地完掘（南から）

調査地北壁断面
(南西から)



調査地南壁断面
(北から)



調査地西壁断面
(東から)





1号土壙 丸瓦 (13)
炭粒検出半載状況
(北から)



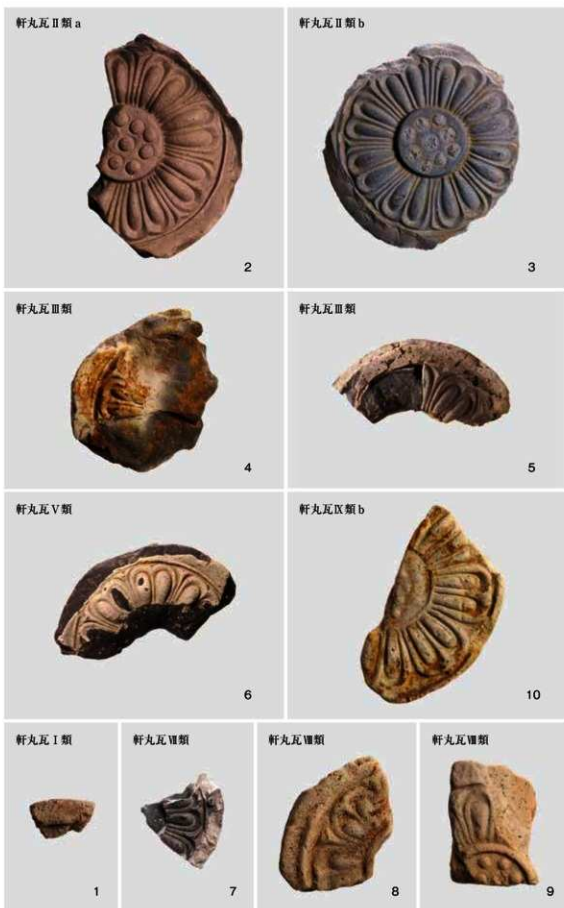
1号土壙完掘 (北から)



塑像 (C5b) 出土状況 (上が南)



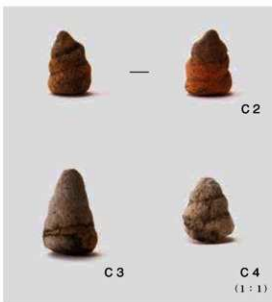
塑像 (C5e) 出土状況 (上が南)



出土遺物（軒丸瓦）

(1:3)





出土遺物 (埴仏・塑像)

2 駄経寺町2丁目地区（大御堂廃寺跡（松ヶ坪地区））

調査地点 倉吉市駄経寺町2丁目11-2・3・6
 調査期間 平成29年4月12日～6月28日
 調査契機 宅地販売
 調査面積 63m²
 調査概要

調査地は国指定史跡大御堂廃寺跡と市道を挟んで南側、松ヶ坪遺跡第1次発掘調査地及び平成29年度大御堂廃寺跡（松ヶ坪地区）発掘調査地の南に位置する。開発範囲に3箇所のトレンチ（以下、「T」と表記。）を設定して調査を行なった（本書3頁第1図）。

調査地の基本層序は、上から造成土、旧耕土（1・1^{''}・1^{'''}層）、旧床土（2・13・24層）、奈良時代～中世の遺物包含層（3^{''}・3^{'''}・14・26層）、縄文時代の遺物包含層（5・15・29層）、無遺物層（6・7・16・30層）である。なお、本報告にあたって、土層注記及び遺物番号を大御堂廃寺跡（松ヶ坪地区）発掘調査との通し番号とした。

以下、調査の概要を述べる。

（1）遺構

1号溝 T2南半の29層上面で検出した東西溝。幅1.8m、確認できた深さは0.5mを測る。顕著な遺物は出土しなかった。

2号溝 T2北端の断面で確認できたのみで、平面での確認はできなかった。幅0.9m以上、確認できた深さは0.3mを測る。顕著な遺物は出土しなかった。

1号土壌 T3北半の15層上面で検出。東西3.4m以上、南北2.1m以上、確認できた深さは約0.9mを測る。埋土中に炭粒、焼土粒が多量に混じるとともに、軒平瓦（37）・熨斗瓦（38）・丸瓦（39・40）・平瓦（41）を含む瓦（焼成不良や二次焼成を受けたものを含む）や須恵器（43）、鉄釘（F3）のほか、埴輪（49・51）・輪羽口（52～54）・銅滓（55～57）・鉄滓（62）・炉壁片（67）などの金属加工関連遺物が多く出土した。

（2）遺物

大御堂廃寺に関連する遺物を中心に報告する。型式分類は特に記載がない場合は『大御堂廃寺跡

発掘調査報告書』¹⁾に従う。なお、量量の（ ）は復元値、[]は残存値である。

瓦類（第3～4図、図版28頁）

軒丸瓦（30～36） 小片を含めて計9点出土。うち、型式のわかるものは4点あり、Ⅲ類・Ⅴ類が各2点である。詳細は第1表に示す。

軒平瓦（37） 平瓦の凸面に2条の凸線が貼り付けられていて、軒平瓦の頸部の可能性がある。詳細は第2表に示す。

熨斗瓦（38） 桶巻づくりの平瓦を焼成前に分割して熨斗瓦としたもの。詳細は第2表に示す。

丸瓦・平瓦（39～42） 瓦類は17コンテナ分出土しているが、遺存度の高いものを図化・計測した。詳細は第2表に示す。

土器（第5図、図版28頁）

須恵器坏蓋（43） 宝珠つまみをもつと推定される。内面に漆のような物質が付着する。外面天井部回転ヘラケズリ、さらに外側をヨコナデ。内面ヨコナデ後、中心を仕上げナデ。胎土は密で、1～2mmの砂粒をわずかに含む。焼成良好。色調は内外面灰白色。器高[2.1]cm。遺存度1/8以下。T3・1号土壌18層出土。

須恵器埴輪（44） 糸切り底の山陰系須恵器である。口縁部がS字状を呈する。外面口縁部～体部ヨコナデ。底部回転糸切り。内面口縁～体部ヨコナデ。底部ナデ。胎土は密で、0.5～2mmの砂粒を含む。焼成良好。色調は内外面灰色。口径(12.4)cm、器高3.6cm、底径(8.0)cm。遺存度は、器高完存、底部1/4以下、口縁部1/8以下。T2南半24層出土。土製品（第5図、図版28頁）

土鎌（45～47） 3点出土。直径0.8～0.9cm、孔径0.3～0.4cmを測る。詳細は第3表に示す。

土馬（48） 須恵質の土馬脚部で、右前足と考えられる。下端部片側をふくらみをもって突出させ、足先を表現する。ヘラケズリ仕上げで稜をもつ。高さ[5.5]cm、幅1.85cm、厚さ2.55cm。胎土は密で、0.1～1mmの白色粒を含む。焼成良好。色調は灰白色。T3南半14層出土。

鉄製品（第5図、図版29頁）

鉄釘（F2・3） F2は片折れの釘頭をもち、

釘身の長さ8.1cm、断面は1.0cm×0.9cmの方形を呈する。T2南半1層出土。F3は釘頭が遺存せず、釘身の長さ[6.5]cm、断面は一辺0.4cmの方形を呈する。T3・1号土壌検出出土。

金属加工関連遺物（第5図、図版29頁）

埴塼（49～51）専用のもの（49）と土師器に粘土を内貼りした転用品（50）がある²⁾。49は口縁部及び底部1/8以下遺存、底部の厚さは2.3cm。内外面ナデ。胎土は密で、3mm以下の石英粒・白色砂粒含む。色調は内面が灰白色で、被熱により淡赤橙色を呈し、外面は灰黄色である。外面には赤褐～赤黒色の物質が付着する。T3・1号土壌20層出土。50は厚さ1.1cmの土師器片の内面に、厚さ1.4cmの粘土が付着する。粘土は被熱により須恵質となり、表面には赤黒色の珪酸質が付着する。T1西半1層出土。51は土師器に内貼りされた粘土と考えられ、緑青が付着する。T3・1号土壌20層出土。

輪羽口（52～54）小片を含めて約22点出土。うち12点の表面には赤色や緑色の珪酸質が付着する。また、孔径が7cmと大きいもの（52）と3～4cmの小さいもの（53・54）がある。52は先端が湾曲した湾曲羽口と考えられる³⁾。詳細は第4表に示す。

銅滓（55～61）緑青で覆われるもの（55～58）と赤銅色を呈するもの（59～61）がある。T3・1号土壌とT1から出土。詳細は第5表に示す。

鉄滓（62～64）鍛冶滓と考えられる。詳細は第5表に示す。

埴壁片（65～67）埴壁もしくは埴塼と考えられる破片が3.61kg出土している。65は大形の溶解埴（飯埴）の破片と考えられる⁴⁾。66・67には緑青が付着する。詳細は第5表に示す。

その他（図版29頁）

窯壁片（68～71）還元炎焼成により灰色を呈し、かつ表面に珪酸質が付着しないもの。計770g

のうち、766gがT2から出土。詳細は第5表に示す。

壁土（72）被熱により橙色を呈するもの。計420gのうち、380gがT3・1号土壌から出土。詳細は第5表に示す。

（3）まとめ

調査の結果、T3で大型土壌1基を検出した。土壌の土層断面と出土遺物の観察から、不用な瓦や金属加工の際に生じた不用物をほぼ一括して廃棄した土壌と考えられる。検出面に近い18層から須恵器碗（44）が出土していることから、この土壌が埋まった時期の上限は8世紀前半と判断できる。一方、T2で東西溝2条を検出したが、遺構の時期や性格は不明である。

調査では鋳型は出土しなかったものの、赤色の珪酸質が付着した湾曲羽口・埴塼・埴壁が出土していることから、調査地付近で鋳銅を行なった可能性が高い。さらに、大形の溶解埴（飯埴）の埴壁が出土していることから、小型の銅製品だけでなく、梵鐘のような大型品を鋳造した可能性も考えられる⁴⁾。

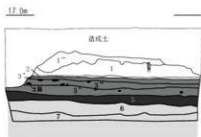
（4）今後の取扱い

T1周辺では事前の発掘調査は必要ない。T2周辺では標高15.7m以下（道路面から深さ90cm以上）に掘削が及ぶ場合、T3周辺では標高16.1m（道路面から深さ50cm以上）に掘削が及ぶ場合に事前の発掘調査が必要である。（小田）

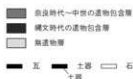
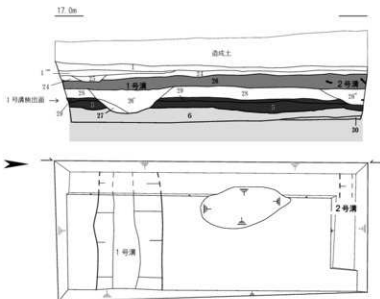
- 1) 倉吉市教育委員会編「史跡大御堂堂跡発掘調査報告書」2001
- 2) 坂本嘉和氏によるご教示。
- 3) 丹羽崇史「奈良時代における湾曲羽口の再検討」国立文化財機構奈良文化財研究所編「文化財論叢N」2012
- 4) 坂本嘉和氏によるご教示。

トレンナNo.	長さ×幅(m)	面積 (m ²)	主な遺構	主な出土遺物
1	7×3	21	なし	軒丸瓦、丸瓦、平瓦、縄文土器、土師器、須恵器、土師質土器、陶磁器、土師、鉄釘、埴塼、輪羽口、銅滓、鉄滓、石製品
2	7×3	21	溝2	軒丸瓦、丸瓦、平瓦、縄文土器、土師器、須恵器、丹塗土師器、瓦質土器、陶器、鉄製品、銅滓、鉄滓、埴塼、窯壁
3	7×3	21	土壌1	軒丸瓦、軒平瓦、製平瓦、丸瓦、平瓦、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、丹塗土師器、瓦質土器、陶磁器、土師、土馬、鉄釘、埴塼、輪羽口、銅滓、鉄滓、埴塼、壁土、石製品

トレンチ1

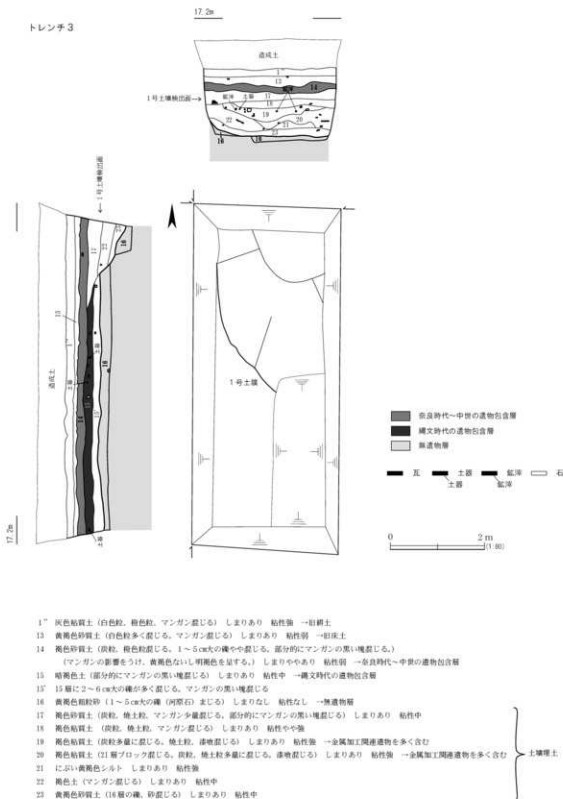


トレンチ2

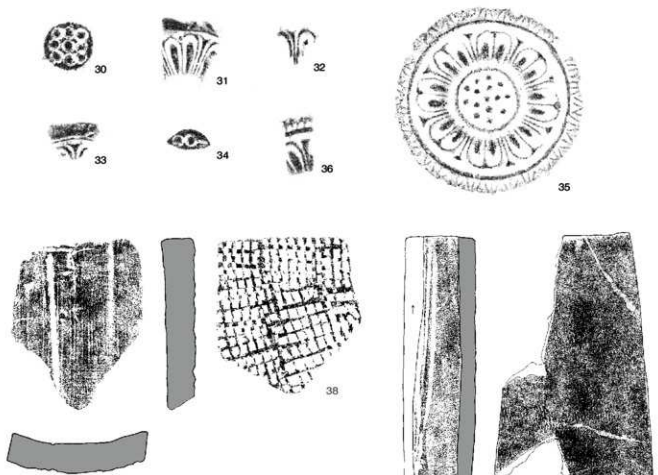


- 1 灰色粘質土（マンガン、白色粒、炭粒混じる）しりあり 粘性やや強 → 旧耕土
 1' 1層と2層の間に、細粒砂の混じり土（マンガン多く混じる） → 旧耕土
 1'' 1層と24層の間に、細粒砂の混じり土 → 旧耕土
 2 灰黄色粘質土 しりあり 粘性やや強 → 旧床土
 3' 灰色粘質土（マンガン、炭粒、白色粒混じる）しりあり 粘性強 → 奈良時代～中世の遺物包含層
 3'' 3'層より砂粒（白色粒）が多く混じる → 奈良時代～中世の遺物包含層
 5 灰色砂質土 しりあり 粘性ややあり → 縄文時代の遺物包含層
 6 中粒砂（粗粒砂混じる） → 無遺物層
 7 灰白色細粒砂 → 無遺物層
 24 灰黄色砂質土（白色粒、黄色粒、マンガン混じる）しりあり 粘性弱 → 旧床土
 25 灰色粘質土と灰黄色細粒砂の混じり土 しりなし 粘性中
 26 灰色粘質土と褐色砂質土の混じり土（白色粒多く混じる）炭粒、黄色粒、マンガン混じる）しりあり 粘性やや強 → 奈良時代～中世の遺物包含層
 26' 26層に、灰黄色シルトのブロック状混じる → 1号溝埋土
 26'' 26層に灰白色シルトのブロック状混じる → 2号溝埋土
 27 黄褐色中粒砂と粗粒砂の混じり砂（マンガン混じる）しりなし 粘性弱 → 1号溝埋土
 28 灰色粘質土（白色粒、黄色粒混じる）しりあり 粘性やや強
 29 暗褐色土（炭粒、黄色粒、マンガン混じる）しりあり 粘性中 → 縄文時代の遺物包含層
 30 30層に、黄褐色シルト しりあり 粘性強 → 無遺物層

第1図 トレンチ1・2遺構図



第2図 トレンチ3遺構図



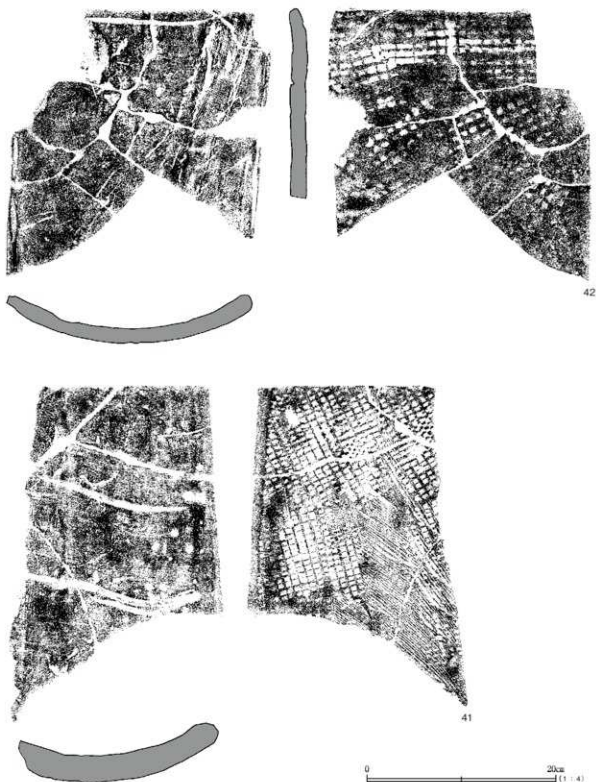
第3図 出土遺物（軒丸瓦・鬘斗瓦・丸瓦）

第1表 軒丸瓦一覧表

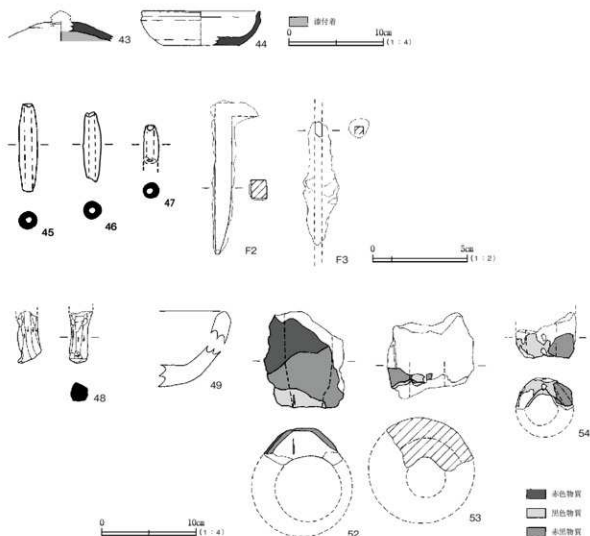
No	形式	瓦の寸法 (mm)	瓦の寸法 (mm)	形状・寸法	胎土・焼成・色調・保存度	出土位置
30	瓦類	中切径 5.5		蓮子1×8（両端切）	胎土厚で、1mm以下の白色・灰色・黄色鉄粒を含有。6mm以下の礫を少量含有。焼成は暗黒、色調は青灰色、中切径のみに残る。	T3北列10層 図1のA点
31	8-9割	[70]		鬘斗瓦半片断	胎土厚で、1mm以下の白色鉄粒を含有。4mm以下の礫を少量含有。焼成は暗黒、色調は青灰色の白地で、裏面に1mm厚の黒色。遺存度は瓦の面1/4以下。	T3北列10層 図1のB点
32	8-9割	[12]		鬘斗瓦半片断	胎土厚で、6mm以下の白色鉄粒を含有。4mm以下の礫を少量含有。焼成は暗黒、色調は青灰色の白地で、裏面に1mm厚の黒色。遺存度は瓦の面1/4以下。	T3西平1層 図1のC点
33	瓦類	[12]		鬘斗瓦半片断	胎土厚で、2mm以下の白色鉄粒を含有。焼成は暗黒、色調は青灰色の白地で、裏面に1mm厚の黒色。遺存度は瓦の面1/4以下。	T3西平1層 図1のD点
34	瓦類	[132]		蓮子1×8	胎土厚で、1mm以下の白色・黄色鉄粒を含有。4mm以下の礫を少量含有。焼成は暗黒、色調は青灰色の白地で、裏面に1mm厚の黒色。遺存度は瓦の面1/4以下。	T3北列10層 図1のE点
35	瓦類	30.3	21	鬘斗瓦半片断	胎土厚で、2mm以下の白色・黄色鉄粒を含有。4mm以下の礫を少量含有。焼成は暗黒、色調は青灰色の白地で、裏面に1mm厚の黒色。遺存度は瓦の面1/4以下。	T3北列10層 図1のF点
36	瓦類	30.3	34	鬘斗瓦半片断	胎土厚で、2mm以下の白色・黄色鉄粒を含有。4mm以下の礫を少量含有。焼成は暗黒、色調は青灰色の白地で、裏面に1mm厚の黒色。遺存度は瓦の面1/4以下。	T3北列10層 図1のG点

第2表 瓦類一覧表

No	名称	寸法 (mm)	寸法 (mm)	形状・寸法	胎土・焼成・色調	出土位置	備考
37	軒丸瓦	[14]		[14]	胎土厚で、6mm以下の白色・黄色鉄粒を含有。焼成は暗黒、色調は青灰色の白地で、裏面に1mm厚の黒色。遺存度は瓦の面1/4以下。	T3・1号13層3割	軒丸瓦1枚（寸法5.5×8.5）
38	軒丸瓦	[14]		[14]	胎土厚で、6mm以下の白色・黄色鉄粒を含有。焼成は暗黒、色調は青灰色の白地で、裏面に1mm厚の黒色。遺存度は瓦の面1/4以下。	T3・1号13層3割	軒丸瓦1枚（寸法5.5×8.5）
39	丸瓦	30.3	[27]	[14]	胎土厚で、6mm以下の白色・黄色鉄粒を含有。焼成は暗黒、色調は青灰色の白地で、裏面に1mm厚の黒色。遺存度は瓦の面1/4以下。	T3・1号13層3割	丸瓦1枚（寸法5.5×8.5）
40	丸瓦	30.3	[15.5]	[14]	胎土厚で、6mm以下の白色・黄色鉄粒を含有。焼成は暗黒、色調は青灰色の白地で、裏面に1mm厚の黒色。遺存度は瓦の面1/4以下。	T3・1号13層3割	丸瓦1枚（寸法5.5×8.5）
41	平瓦	[14]		[14]	胎土厚で、6mm以下の白色・黄色鉄粒を含有。焼成は暗黒、色調は青灰色の白地で、裏面に1mm厚の黒色。遺存度は瓦の面1/4以下。	T3・1号13層3割	平瓦1枚（寸法5.5×8.5）
42	平瓦	[14]		[14]	胎土厚で、6mm以下の白色・黄色鉄粒を含有。焼成は暗黒、色調は青灰色の白地で、裏面に1mm厚の黒色。遺存度は瓦の面1/4以下。	T3・1号13層3割	平瓦1枚（寸法5.5×8.5）



第4図 出土遺物（平瓦）



第5図 出土遺物（土器・土製品・鉄製品・金属加工関連遺物）

第3表 土錘一覧表

No.	長さ (cm)	最大径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	底土位置
45	47	69	31	31	T1西平1層
46	127	69	63	56	T1西平1層
47	128	68	62	55	T1西平1層

第4表 轆羽口一覧表

No.	長さ (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	取組・手法	胎土	色調	底土位置
52	103	106	70	丸型をやや平にする。底の断面は円筒形。丸型断面は平型付。底径の裏面側（おさらく平側）には丸型と平型を併せて成形。	赤、2mm以下の白粉・赤黒色を含有。	内面：灰白色 内底：浅褐色	T3・1号土層2層
53	181	112	142	丸型をやや平にする。底の断面は平型付。底径の裏面側（おさらく平側）には丸型と平型を併せて成形。	赤、2mm以下の白粉・赤黒色を含有。	内面：灰白色 内底：浅褐色	T3・1号土層2層
54	148	68	58	丸型をやや平にする。底の断面は平型付。底径の裏面側（おさらく平側）には丸型と平型を併せて成形。	赤、2mm以下の白粉・赤黒色を含有。	内面：灰白～灰褐色 内底：浅褐色	T3・1号土層2層

第5表 銅滓・鉄滓・炉壁・窯壁・壁土一覧表

No.	名称	最大径 (cm)	最大径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	底土位置	備考
55	銅滓	49	41	21	91	T3・1号土層2層	緑青に覆われる。
56	銅滓	39	21	11	20	T3・1号土層2層	緑青に覆われる。
57	銅滓	27	20	15	19	T3西平1層	緑青に覆われる。
58	銅滓	28	22	14	25	T1西平1層	緑青に覆われる。
59	銅滓	44	29	24	66	T1西平1層	緑青に覆われる。
60	銅滓	28	22	13	27	T1西平1層	
61	銅滓	30	25	11	11	T1西平1層	
62	鉄滓	34	41	18	82	T3・1号土層2層	
63	鉄滓	47	44	16	70	T3西平1層	
64	鉄滓	35	39	21	21	T3西平1層	
65	炉壁内（鉄滓付）	170	164	14	360	T3西平・底平2層	底径の位置が不明。底径は不明。底径は不明。
66	炉壁内	32	49	23	103	T1西平1層	緑青付。
67	炉壁内	37	66	23	72	T3・1号土層2層	底径不明。底径不明。
68	炉壁内	77	77	38	140	T2西平1層	底径不明。
69	炉壁内	60	48	32	74	T2西平1層	底径不明。
70	炉壁内	33	48	24	28	T2西平1層	底径不明。
71	炉壁内	41	44	49	48	T3西平1層	底径不明。
72	壁土	64	75	50	179	T3・1号土層2層	底径不明。

トレンチ1（西から）



トレンチ1 断面
（南から）



トレンチ2（北から）





トレンチ 2 断面
(東から)



トレンチ 2 1号溝
中左：検出（東から）
中右：完掘（東から）



トレンチ 3（南から）

トレンチ3断面
(南東から)



トレンチ3 1号土坑
中：断面(南東から)
下左：検出(北東から)
下右：完掘(北東から)





出土遺物（軒丸瓦・軒平瓦・甃斗瓦・土器・土製品）



(2:5)

出土遺物（鉄製品・金属加工関連遺物等）

3 東岩倉町地区（旧倉吉町遺跡群）（平成28・29年度）

調査地点 倉吉市東岩倉町2280

調査期間 平成29年3月7日～3月17日

平成29年7月20日～8月29日

調査契機 旧牧田家住宅付属屋等改修工事

調査面積 83m²

調査概要

調査地は、市指定有形文化財 旧牧田家住宅付属屋の内部と南側の玄関・テラス部分である。事業予定地内に4箇所のトレンチを設定して調査を行なった。

〔平成28年度〕

玄関先に設定したトレンチ1ではテラス造成土を掘下げると中央から西側にかけて三和土を確認した。また、トレンチ中央付近では南北方向に延びる石列と長径約60cm、短径約30cmの楕円形の自然石を確認した。この石列と自然石は付属屋中

央の柱通り上に位置するため、付属屋式台部分の袖壁基礎の土台石と考えられる。この土台石は打吹山の土を主体とした炭混じりの橙色土に据えられている。これは東側の主屋でも同じ状況が確認されており、建築当初の造成土と考えられる。

橙色土の下層は炭混じりの褐色土となる。この層では30cm以上の自然石が同じ高さで複数確認されたため、時期は不明であるが、下層遺構が存在する可能性がある。

〔平成29年度〕

トレンチ1は付属屋式台玄関南側の門・塀が想定されている部分に設定し調査を行なった。全体的に排水管などによる攪乱を受けており、遺構は確認されなかった。

トレンチ2は敷地南西隅に南北方向のトレンチを設定し調査を行なった。道路側溝から北側1m

平成28年度

トレンチNo.	規模 (m)	面積 (m ²)	主な遺構	主な出土遺物
1	10×2	20	土台石、石列、三和土	横瓦、赤瓦、陶磁器

平成29年度

トレンチNo.	規模 (m)	面積 (m ²)	主な遺構	主な出土遺物
1	10×2	20	なし	横瓦、赤瓦、陶磁器、銅銭（寛永通寶）
2	10×2	20	なし	横瓦、赤瓦、陶磁器
3	11.5×2	23	なし	横瓦、赤瓦、土師質土器、陶磁器



旧牧田家住宅平面図・トレンチ配置図

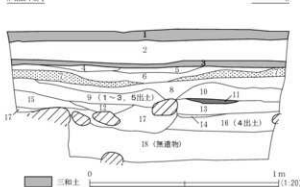
のところで東西方向に延びる長さ1.9mの石列と、トレンチ西側の隣地境界付近で南北方向の石列を確認した。これらの石列は塀の痕跡と考えられ、L字状に塀があったと推測される。

トレンチ3は付属屋屋内（八畳間）に設定し調査を行なった。付属屋の三和土の面から70cm掘下げ、確認を行なった。付属屋建設に伴う造成土の下層で前身建物の三和土を確認し、この上面で多量の炭化物が出土した。平成19年の主屋内の調査でも同様の状況が確認されている。現存建物建築以前に火災があった可能性がある。（箕田）

トレンチ3出土遺物のうち、土師質土器、陶器、磁器を図化した。

1は土師質土器皿である。底部に糸切り痕を残し、口縁部・体部はわずかに内湾する。2・3は須佐唐津産の陶器描鉢である。2は描鉢口縁部片で内面6条単位の描目。口縁をやや内傾させて折り返す。3は描鉢底部片で内面7条単位の描目。高台外側を面取りする。4は肥前産のオリーブ灰色軸陶器皿底部片であり、内面に段をもち、内外面に砂目がみられる。高台は露台であり、高台内には兜巾がみられる。5は磁器碗であり、体部はやや内湾し、外面に草花文を描く。（岩田）

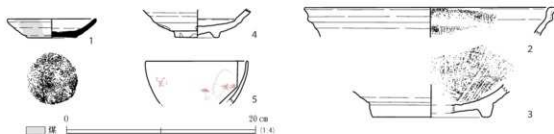
5. 断面図



- 1 粉色土（5cm大の礫含む、よくしまる）※付属屋三和土
- 2 粉色土と暗褐色土の混り土（礫、赤褐色土、炭含む）※昭和40年住宅建築時造成土
- 3 暗褐色土（漆喰、炭含む）※前身建物の三和土
- 4 黒褐色土（炭・焼土含む）一寛政3年（1750）又は宝暦3年（1753）の火災か（四府年表）
- 5 黒色砂質土
- 6 褐色土と白灰色砂の混り土
- 7 白灰色砂 →享保6年（1721）又は享保14年（1729）の洪水か（四府年表）
- 8 粉褐色土と暗褐色土の混り土（炭含む）
- 9 赤褐色砂質土（炭含む）
- 10 暗褐色土と暗粉褐色土の混り土（炭含む）
- 11 暗褐色土（炭多く含む）一元禄8年（1695）の火災か（鳥取県史）
- 12 灰褐色砂質土
- 13 黄褐色土（よくしまる）
- 14 黄褐色粘質土
- 15 褐色土と粉色土の混り土
- 16 暗褐色砂質土
- 17 灰褐色砂質土（15cm大礫含む）
- 18 赤褐色砂（礫多く含む）

※5層は主筋大黒柱掘り上げによる

トレンチ3断面図



トレンチ3出土遺物

法量cm・()は推定値・[]は現存値

No.	出土位置	器種	種別	法量 (cm)	色調	備考
1	H29 T3中央 9層	土師質土器	皿	口径 9.4 器高 [20]	灰白色	ロクロ成形、底部回転糸切調整、外面煤付着
2	H29 T3中央 9層	陶器	描鉢	口径 (23.0) 器高 [31]	暗赤褐色	須佐唐津、焼鉢、18C前半
3	H29 T3北側 9層	陶器	描鉢	底径 (12.4) 器高 [35]	暗赤褐色	須佐唐津、高台が増減している、焼鉢、18C前半
4	H29 T3南側 16層	陶器	皿	器高 [295]	オリーブ灰色	唐津、内外面砂目あり、17C前半
5	H29 T3東壁 9層	磁器	碗	口径 (10.3) 器高 [45]	灰白色	外面文様に赤・緑色草花文



H28トレンチ1 石列検出状況（東から）



H28トレンチ1 石列・土台石検出状況（南から）



H29
調査地全景（西から）



H29トレンチ2
石列・土台石検出状況（南から）

H29トレンチ3 全景（南から）



H29トレンチ3 断面（西から）



出土遺物

- 1 土師質土器 皿 (H29T 3)
- 2 陶器 掻鉢 (H29T 3)
- 3 陶器 掻鉢 (H29T 3)
- 4 陶器 皿 (H29T 3)
- 5 磁器 碗 (H29T 3)
- 6・7 榎瓦刻印 (『堺北喜十良』
(H29T 1))
- 8 銅銭 (寛永通寶) (H29T 1)

4 東岩倉町地区 (旧倉吉町遺跡群) (平成30年度)

調査地点	倉吉市東岩倉町2280
調査期間	平成30年10月4日～10月24日
調査契機	倉吉淀屋屋外トイレ整備工事
調査面積	15m ²
調査概要	

調査地は市指定有形文化財 旧牧田家住宅の主屋北側に位置する。造成土直下には近現代遺物を含む三和土があり、その下層で礫を多量に含む橙褐色土を確認した。この橙褐色土を掘下げると、トレンチ北側で東西方向に並ぶ大型の板石を確認した。確認のためこの板石を取外したところ、幅約35cmの石組みの水路を確認した。水路の護岸石は1～0.2m大の切石を使用しているが、西側については延石を使用している。この水路の深さは約20cmで、底には木製の板が敷かれ、その端には釘や釘穴があり、一部立ち上がりの板も確認された。よって、当初水路内には木樋が設置され

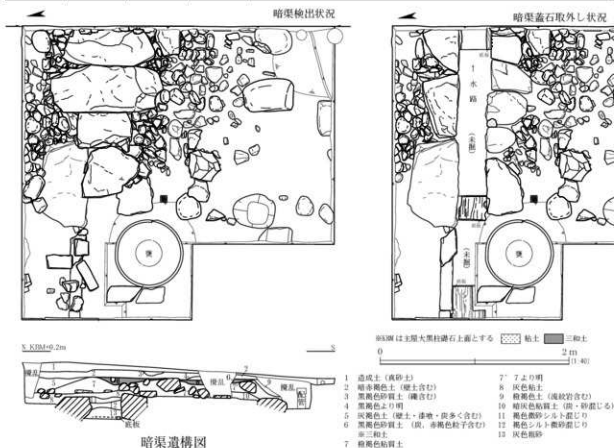
ていたと考えられる。この暗渠はトレンチの東端の方が西端に比べ約20cm低い。よって、この暗渠は井戸の周辺で使用した水を東側の敷地境界にある水路に流すためのものと考えられる。

板石を埋める橙褐色土からは煙瓦・灯明皿が出土している。また、水路内からは木製の杓文字が出土した。造成土・攪乱土からではあるが、「堺北喜十良」の刻印のある煙瓦が2点出土した。

トレンチ西側では直径約60cmの素焼きの甕が据えられていた。石組みは一部失われており、掘方内からはガラスなど近代以降の遺物が出土した。また、暗渠の南側約1.5mのところで50cm大の自然石や石の抜取り穴も確認された。主屋の付属施設の土台石を抜取った可能性があるが、調査範囲が限られており、性格は不明である。

工事にあたって、この水路は現地保存することとした。(箕田)

トレンチNo.	規模 (m)	面積 (m ²)	主な遺構	主な出土遺物
1	3.3×2.3 一部拡張	15	暗渠	煙瓦、赤瓦、陶磁器、灯明皿、銅銭(寛永通寶)、杓文字、木札





暗渠検出状況（西から）右上
暗渠蓋石取外し状況（東から）上



水路断面（西から）



水路検出状況（西から）



出土遺物

- 1～3 燧瓦当面
- 4・5 燧瓦刻印
〔「堺北喜十良」〕
- 6 陶器 灯明皿
- 7 磁器 皿
- 8 磁器 碗
- 9 磁器 碗
- 10 杓文字
- 11 銅銭（寛永通寶）

5 下福田地区（下福田後口野遺跡）

調査地点 倉吉市下福田706-351
 調査期間 平成29年4月11日～4月18日
 調査契機 動物愛護センター会議棟新築
 調査面積 22m²
 調査概要

調査地は国府川北部にある緩傾斜の広大な丘陵地である久米ヶ原に位置し、戦後本格的な開拓がなされた昭和開拓地区にあたる。開発範囲内に10×2mのトレンチを設定し調査を行なった。

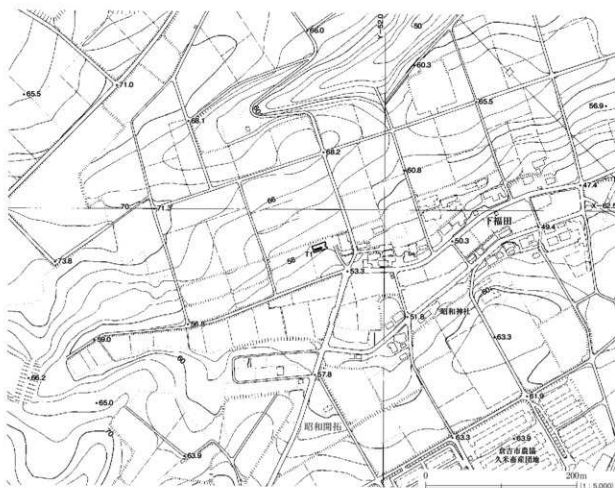
基本層序は、上から表土、客土（真砂土）、黒色土（遺物包含層・クロボク）、黒褐色土（漸移層）、褐色土（ソフトローム）、黄灰色砂質土（ホーキ火山灰砂層）、にぶい黄橙色土（AT：始良丹沢火山灰層）、にぶい橙色土（礫混じり粘質土）である。

トレンチ西半はすでに削平を受けており、地山が削平されず残っていたのは東約5mの範囲であった。

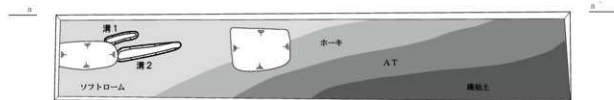
調査の結果、トレンチ東端で溝（幅約20cm）を2条検出したため、東側に1m拡張した。その結果、溝1は長さ約60cmを測り、溝2は攪乱によって切れ全容を確認できなかった。確認のため2条の掘り下げを行なったところ、検出面からの深さは3～5cmの浅いもので、遺物は出土しておらず、性格は不明である。その他の遺構は検出されず、遺物も一次堆積の黒色土（クロボク）から弥生土器や土師器の小片がわずかに出土しただけであった。

開発範囲内は削平が著しく、その他の遺構は存在しないと考えられる。（片岡）

トレンチNo	規模（m）	面積（m ² ）	主な遺構	主な出土遺物
1	11×2	22	溝2	弥生土器、土師器



T 1 平面図



T 1 断面図



トレンチ1 (東から)



出土遺物 1 土師器 壺差類
2 土師器 高坏
3 土師器 高坏

6 大谷茶屋地区

調査地点 倉吉市大谷茶屋字イザ原883-238

調査期間 平成29年8月2日～8月8日

調査契機 個人住宅建築

調査面積 20m²

調査概要

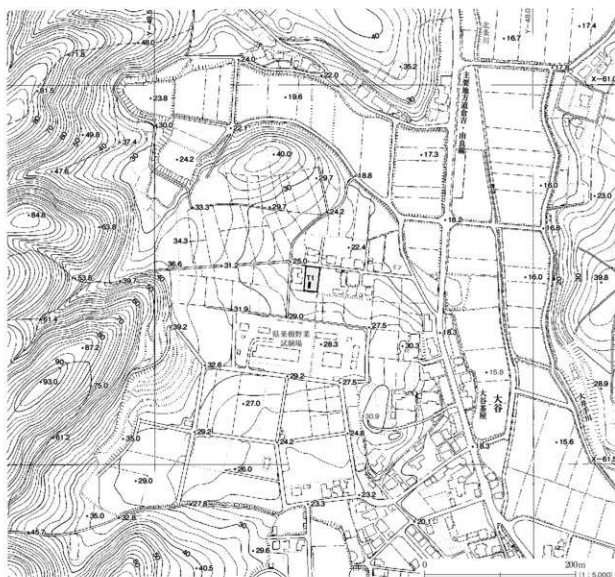
調査地は、南から北へくだる丘陵斜面に位置し、イザ原遺跡の範囲内に含まれる。三度舞大將塚古墳（弥生墳丘墓）の北西約170m、上神大將塚古墳の南約320mに位置する（いずれも市指定史跡）。現状は宅地である。開発予定地内に1箇所のトレンチを設定し調査を行なった。

基本層序は、上から造成土、黒色土（クロボク）、黒褐色土（漸移層）、暗褐色土（ソフトローム）である。南へくだるほど宅地造成時及び造成以前の攪乱が深くまで及んでおり、地山を確認できたのは北端から約2.8mの範囲だけであった。

調査の結果、遺構は確認できなかった。遺物は黒色土中より弥生土器や瓦質土器の小片がわずかに出土した。

以上のことから、調査地内に遺跡は存在しないと判断される。（小田）

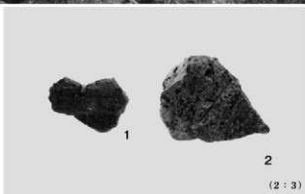
トレンチNo	規模（m）	面積（m ² ）	主な遺構	主な出土遺物
1	10×2	20	なし	弥生土器、瓦質土器



トレンチ1 (南から)



トレンチ1断面
(南東から)



出土遺物 1 弥生土器 甕・甕類
2 瓦質土器 鍋

7 国府地区（両長谷遺跡）

調査地点 倉吉市国府字両長谷、字西麻付

調査期間 平成29年8月17日～9月14日

平成29年12月18日

～平成30年3月23日

平成30年6月13日～7月25日

調査契機 産業廃棄物最終処分場造成事業

調査面積 820m²

調査概要

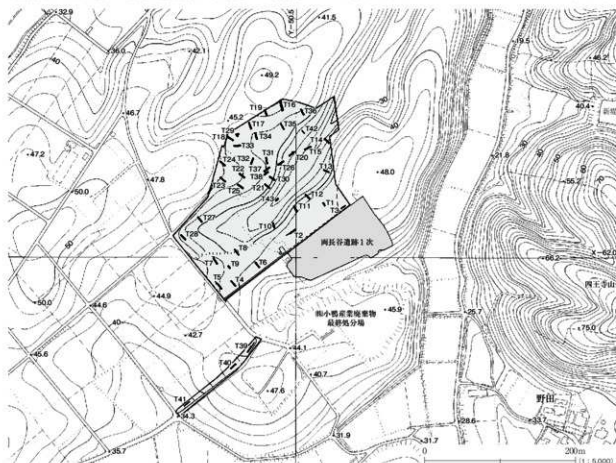
調査地は四王寺山と谷を隔てて西側の丘陵上及び谷部に位置する。開発範囲の南東隣では平成7年度に両長谷遺跡第1次発掘調査が行なわれている。開発範囲内に43箇所のトレンチを設定して調査を行なった。

調査地の基本層序は、黒褐色土（表土）、黒色土（クロボク）、暗褐色土（漸移層）、褐色土（ソフトローム）、黄褐色土（漸移層）、黄灰色砂質土（ホーキ火山灰砂層）、黄褐色砂質土（AT：始良丹沢火山灰層）、橙褐色粘質土（凝滞じり粘質

土層）、黄橙色土（D.K.P.：大山・倉吉軽石層）である。遺構検出は褐色土～黄灰色砂質土上面で行なった。

調査の結果、調査地中央の谷部より南側の尾根上では、トレンチ2・5・11で竪穴建物2棟と土壇2基を検出した。この尾根は第1次調査地に隣接しており、遺跡の広がる可能性が高い。一方、谷部より西～北側の丘陵斜面では、トレンチ20で土壇1基、トレンチ29で落し穴1基を検出し、記録保存を行なった。周辺のトレンチでの遺物の出土量が少なく、遺跡の広がる可能性は低い。また、飛び地となっている開発予定地（トレンチ39～41付近）では、トレンチ39で竪穴建物1棟とビット1穴を検出した。

以上のことから、開発範囲のうち、南側の尾根上（トレンチ2・5・11の周辺）と飛び地の丘陵上（トレンチ39の周辺）において事前の発掘調査が必要である。（小田）



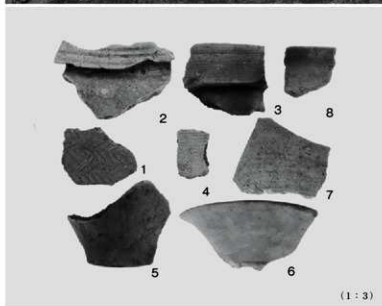
トレンチNo.	規模 (m)	面積 (m ²)	主な遺構	主な出土遺物
1	5.5×2	11	なし	弥生土器
2	10×2 5×1	25	竪穴建物 2	弥生土器、須恵器、丹塗り土師器、竈具
3	8×1.5	12	なし	弥生土器
4	10×2	20	なし	弥生土器
5	10×2 4×1 1×1	25	土壌 1	縄文土器、弥生土器
6	10×2	20	なし	弥生土器
7	10×2	20	なし	なし
8	10×2	20	なし	なし
9	5×2	10	なし	弥生土器
10	10×2	20	なし	弥生土器
11	10×2 2×1	22	土壌 1	弥生土器
12	10×2	20	なし	弥生土器
13	10×2	20	なし	弥生土器
14	10×2	20	なし	弥生土器
15	10×2	20	なし	弥生土器、須恵器、奈良甕
16	15×2	30	なし	弥生土器、奈良甕
17	10×2	20	なし	なし
18	10×2	20	なし	なし
19	10×2	20	なし	弥生土器
20	10×2 2×1	22	土壌 1	弥生土器
21	10×2	20	なし	弥生土器、土師器
22	10×2	20	なし	なし
23	10×2	20	なし	なし
24	10×2	20	なし	なし
25	10×2	20	なし	弥生土器
26	10×2 2×1	22	なし	なし
27	10×2	20	なし	なし
28	10×2	20	なし	なし
29	5×2 2×1	12	竪穴 1	なし
30	10×2	20	なし	なし
31	10×2	20	なし	弥生土器
32	10×2	20	なし	弥生土器
33	10×2	20	なし	弥生土器
34	10×2	20	なし	弥生土器
35	10×2	20	なし	弥生土器
36	10×2	20	なし	弥生土器、奈良甕
37	10×2	20	なし	なし
38	6.5×2	13	なし	なし
39	10×2 6×1	26	竪穴建物 1、ピット 1	弥生土器、磨石、黒曜石
40	10×2	20	なし	なし
41	10×1.5	15	なし	弥生土器
42	5×1.6	8	なし	奈良甕
43	6×1.2	7	なし	布目瓦 (平瓦)



トレンチ2（北東から）



トレンチ39（南西から）

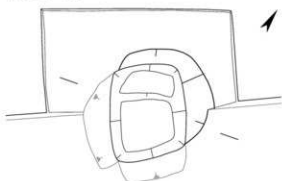


出土遺物

- 1 縄文土器 深鉢 (T5)
- 2 弥生土器 甕 (T39)
- 3 弥生土器 甕 (T5)
- 4 弥生土器 甕 (T10)
- 5 弥生土器 甕 (T39)
- 6 土師器 鼓形器台 (T21)
- 7 須恵器 甕 (T2)
- 8 奈良甕 (T15)

(1 : 3)

トレンチ20 土塙

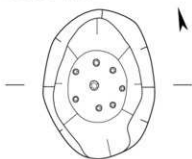


26.9m

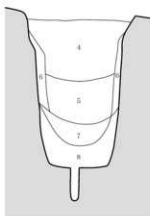


- 1 黒色土 しまりあり 粘性中 白色・黄色粒少量混じる
- 2 黒色土 しまりあり 粘性中 白色・黄色粒混じる
1cm大のホーキブロック極少量混じる
- 3 黒色土と暗褐色土の混じり土 しまりあり 粘性中
白色・黄色粒混じる 1.5cm大のホーキブロック極少量混じる
- 4 黒色土 しまりあり 粘性中 1cm大のホーキブロック少量混じる
- 5 黒色土 しまりあり 粘性中 1〜2cm大のホーキブロック混じる
1cm大のA型ブロック極少量混じる
- 6 黒褐色土 しまりなし 粘性中
黄色粒 0.5〜3cm大のホーキ・A型ブロック混じる
- 7 黒色土 しまりあり 粘性中 10cm以上の凝結土ブロック混じる
黄色粒 0.5〜5cm大のホーキブロック混じる
- 8 黒色土 しまりあり 粘性中 黄色・褐色粒混じる
5cm大のホーキブロック少量混じる

トレンチ29 落し穴



44.9m



0 1m
1:40

遺構図



トレンチ20 土塙完掘 (南東から)



トレンチ29 落し穴完掘 (南から)

8 石塚地区

調査地点 倉吉市上古川字平ノ前、石塚字山ノ下タ

調査期間 平成29年9月19日～12月15日

調査契機 国道313号（倉吉関金道路）改良工事

調査面積 120m²

調査概要

調査地は、北東方向へ伸びる天神野丘陵の東裾から東に広がる平野地に位置し、県指定史跡 石塚庵寺跡の北東側にあたる。現況は水田である。開発範囲の一部に6箇所のトレンチを設定して調査を行った。

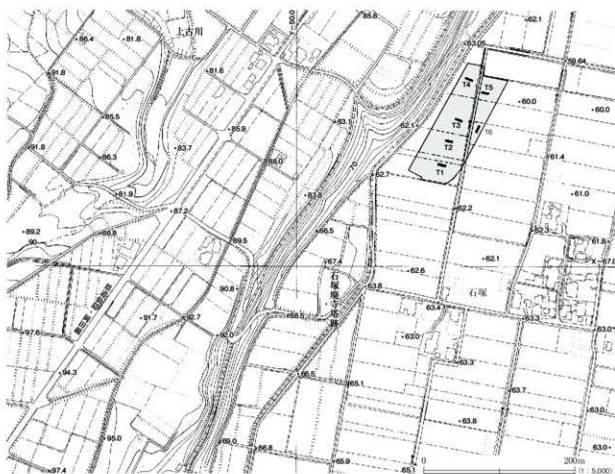
調査の結果、トレンチ1・2・5・6では流水な

いし洪水の痕跡がみられ、トレンチ3・4では圃場整備に伴う造成が行なわれていて、いずれのトレンチでも遺構は確認できなかった。遺物は、鍋や皿などの土師質土器の破片を中心に、須恵器、瓦質土器、陶磁器の破片のほか、わずかに布目瓦の破片が出土した。これらの遺物は摩滅していることから、他所から流入し、二次堆積したものと考えられる。

以上のことから、今回の調査範囲内には遺跡が存在しないと判断される。
(小田)

1) 太宰府市教育委員会編『太宰府条坊跡XV 一陶磁器分類編一』太宰府市の文化財第49集 2000

トレンチNo	規模 (m)	面積 (m ²)	主な遺構	主な出土遺物
1	10×2	20	なし	須恵器、土師質土器、瓦質土器、須恵質陶器、布目瓦（丸瓦）、紙滓
2	10×2	20	なし	手づくね土器、土師質土器、陶器、布目瓦（平瓦）
3	10×2	20	なし	縄文土器、土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、須恵質陶器、陶器、布目瓦（平瓦）
4	10×2	20	なし	須恵器、陶器、青磁碗（龍泉窯系青磁碗1類 ¹⁾ ）
5	10×2	20	なし	丹塗り土師器、土師質土器、陶器、布目瓦（平瓦）、銅銭（寛永通寶）
6	10×2	20	なし	なし





トレンチ3 (東から)



トレンチ5 (西から)



- 出土遺物
- | | |
|-----------------|-------------------------------------|
| 1 丹塗り土師器 皿 (T5) | 6 青磁碗 (龍泉窯系青磁碗Ⅰ類 ¹⁾ (T4) |
| 2 手づくね土器 碗 (T2) | 7 布目瓦 (丸瓦) (T1) |
| 3 土師質土器 捏鉢 (T3) | 8 布目瓦 (平瓦) (T3) |
| 4 土師質土器 皿 (T3) | 9 銅銭 (寛永通寶) (T5) |
| 5 土師質土器 皿 (T3) | |

9 国分寺地区（国分寺宮ノ峰遺跡）

調査地点 倉吉市国分寺宮ノ峰382
 調査期間 平成30年4月12日
 調査契機 平成29年単県斜面崩壊復旧工事
 調査面積 100m²
 調査概要

調査地は国指定史跡 伯耆国府跡が所在する久米原丘陵東端南側裾部にあたる。斜面崩壊復旧工事に伴う工事立会で新たに遺跡が発見され、事業予定地内での遺構の記録保存（測量調査・写真撮影）を行なった。

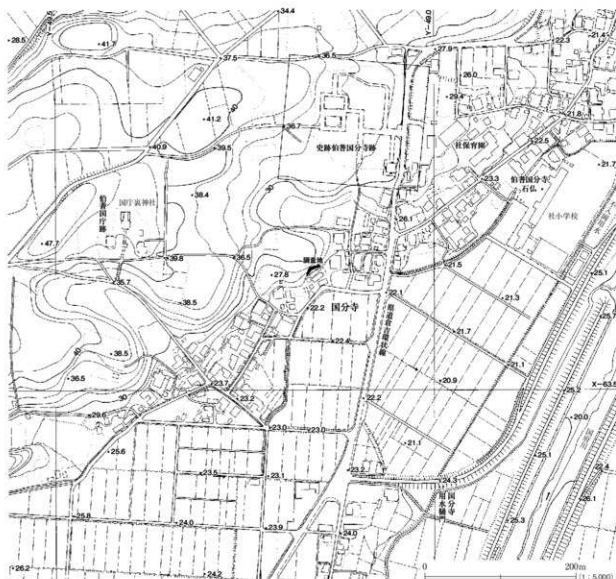
調査地の基本層序は、上から黒褐色土（表土）、

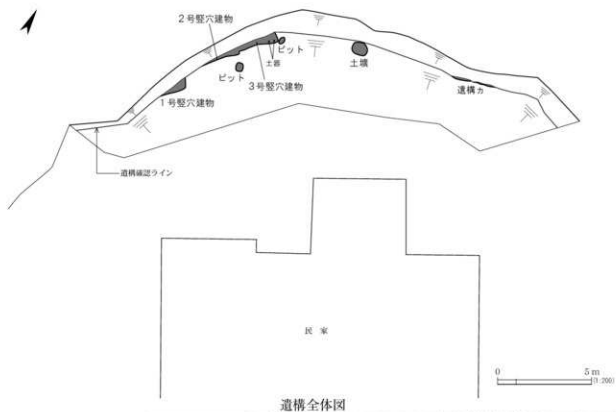
褐色土（ソフトローム）、黄灰色砂質土（ホーキ火山灰砂層）、以下自然堆積層である。遺構は褐色土（ソフトローム）上面で確認した。

調査の結果、竪穴建物を3棟、土塼を1基、ピットを2穴確認した。遺構の一部はすでに削られているが、北側に遺存しており、遺跡がさらに広がる。遺物は、1号竪穴建物、3号竪穴建物、ピットから古墳時代の土師器がわずかに出土した。

丘陵北側には現地表面より約30cm以下に遺構が存在するため、掘削に際しては、事前の発掘調査が必要である。（岩田）

トレンチNo	規模 (m)	面積 (m ²)	主な遺構	主な出土遺物
-	-	100	竪穴建物3、土塼1、ピット2	土師器





道構全体図



調査地（東から）

3号竪穴建物出土遺物

- 1 土師器 壺
- 2 土師器 壺
- 3 土師器 壺亮類
- 4 土師器 壺亮類



10 河原町地区（旧倉吉町遺跡群）

調査地点 倉吉市河原町1936-1
調査期間 平成30年5月24日～6月15日
 平成30年11月12日～12月10日
調査契機 小川氏庭園保存処理事業
調査面積 24.1m²
調査概要 小川氏庭園は、昭和5年頃に作庭された近代庭園である。本通り側の前庭・主屋南側の中庭・鉢屋川沿いの環翠園からなり、県指定名勝・国登録記念物となっている。環翠園の保存処理事業に伴い調査を行なった。

まず、池内にトレンチを5箇所（T1～5）設定し、池底の構造・堆積状況・護岸石との関係などの調査を行なった。その結果、トレンチ1は約

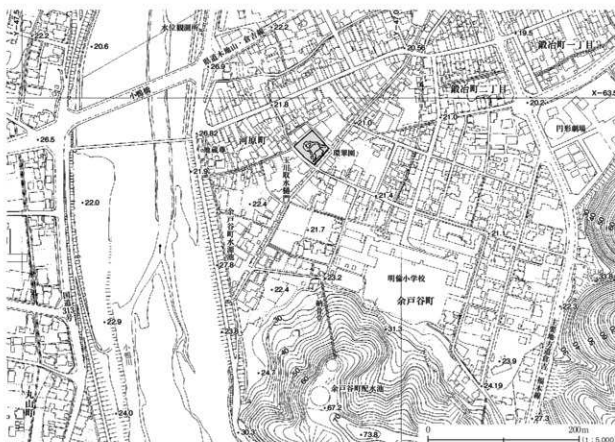
20cm、トレンチ2では約10cmの砂の堆積を確認した。池底はモルタルを敷き、その上に直径5cm程度の大きさの川原石が敷かれていた。モルタルは脆くなっており、トレンチ1の東側では確認できないところがあった。

トレンチ3では、砂・粘質土が10cm堆積していた。池底は護岸側からトレンチ中央に向けてゆるやかに傾斜しており、直径15cm大の石を敷き詰めて隙間をモルタルで埋める構造だった。その上には、長さ3～20cm大の川原石が15cm程度の厚みで敷かれていた。

トレンチ4では東側でレンガ敷き、西側でモルタル敷きの池底を確認した。レンガとモルタルの

トレンチNo.	規模 (m)	面積 (m ²)	出土遺物
1	1.4×1.0	1.4	磁器
2	2.0×1.0	2.0	なし
3	3.2×1.0	3.2	陶磁器
4	2.8×1.0	2.8	陶磁器
5	5.1×1.0	5.1	磁器、機瓦、玉砂子
6	3.5×0.7	2.45	磁器、漆鉢

トレンチNo.	規模 (m)	面積 (m ²)	出土遺物
7	1.5×0.9	1.35	なし
8	2.0×0.7	1.4	なし
9	3.7×0.7	2.59	なし
10	1.3×0.7	0.91	なし
11	0.7×0.5	0.35	なし
12	1.1×0.5	0.55	なし



トレンチ5は南山荘北東側の鯉溜りに設定して調査した。鯉溜りはレンガで楕円形に形作られている。鯉溜りの底はモルタル仕上げで、砂が約



1	石堂	17	石鼓	33	雙塘荷合	49	岸戶、松溪北	65	龍塘	81	龍塘
2	鳴	18	雙潭石	34	石鼓	50	石鼓	66	龍塘	82	龍塘
3	塘	19	石鼓	35	石鼓	51	雙塘	67	雙石	83	石鼓
4	塘	20	茶亭	36	雙塘	52	石鼓	68	龍塘	84	石鼓
5	塘	21	塘	37	石鼓	53	茶亭	69	石鼓	85	石鼓
6	塘	22	塘	38	石鼓	54	茶亭	70	塘	86	塘
7	塘	23	塘	39	雙石	55	塘	71	塘	87	雙石
8	塘	24	塘	40	雙塘、通	56	塘	72	塘	88	塘
9	塘	25	塘	41	塘	57	石鼓	73	塘	89	石鼓
10	中門	26	雙塘	42	石鼓	58	塘	74	石鼓	90	塘
11	石鼓	27	塘	43	石鼓	59	塘	75	塘	91	塘
12	塘	28	石鼓	44	塘	60	塘	76	塘	92	塘
13	塘	29	石鼓	45	石鼓	61	塘	77	塘	93	塘
14	中島	30	塘	46	塘	62	塘	78	石鼓	94	塘
15	塘	31	塘	47	石鼓	63	塘	79	塘		

小川氏庭園（環翠園）構成要素・トレンチ配置図

30cm堆積していた。レンガの下では一部で土が流され、空洞になっていた。

なお、トレンチ4・5では、ともに護岸石がレンガの上に設置されていた。このことから作庭にあたっては、池底の工事をしてから護岸石を設置し、南山荘を建築したものと考えられる。

次に、腐葉土などの堆積状況や築山の構築土を確認するため、トレンチを4箇所（T6～9）設定し、調査を行なった。トレンチ6では庭園北西隅の築山に最も厚い所で24cmの堆積土があり、地形が築庭時から大きく変化していることが分かった。さらに一部掘り下げを行なったところ、確認できた範囲で築山は砂で構築されていることが分かった。一方、石貼の園路は明褐色の細砂の上に造られていたが、築庭時の表土が流出し、一部が陥没していることを確認した。

トレンチ7・9は堆積土が少なく、厚さ2～6cmであった。灯籠（No17・No47）は基壇を据えるための掘り方を確認できなかったことから、築山の造成と同時に建てられた可能性がある。

トレンチ8は園路（No71）の北に設定した。確認できた範囲では園路背後の築山が砂で築かれており、そこから流出した砂で園路が一部埋没して

いることを確認した。ここでは、築山斜面に東西方向で瓦が埋設されており、そのための掘り方も確認できた。砂の流出を防止するため、瓦を埋設して補修を行なったと考えられる。

また、池の護岸石組の裏込め土や石据付状況を確認するため、石組み背後にトレンチを3箇所（T10～12）設定し調査を行なった。トレンチ10では大型護岸石の背後で水止めのモルタルを確認したが、護岸石との間に約5cmの隙間があり、護岸石が南東側（池側）に傾斜したことで隙間が生じたものと考えられる。また、モルタルの北西側（築山側）にも空洞が確認され、築山側からの雨水等により洗掘されたものと考えられる。

トレンチ11・12では、護岸石組みの背後を黒褐色の粘質土で埋められていたが、これは補修に伴い、充填された土と考えられる。トレンチ11では、護岸石と護岸石の間に水止めのモルタルを確認し、この周辺では、洗掘による空洞ができていた。

トレンチ12では水止めのモルタルは確認できなかった。その北東の島端では直径5cm大の川原石を含む褐色荒砂を確認し、これは土層断面から亀島を構成する砂と考えられるものである。

（箕田）



トレンチ2（東から）



トレンチ3（北西から）



トレンチ4（北から）



トレンチ5 (東から)



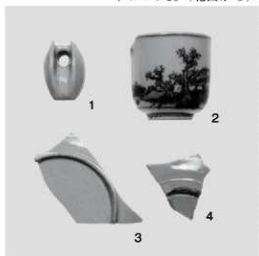
トレンチ6 (東から)



トレンチ10 (北西から)



トレンチ10断面 (西から)



出土遺物

- | | |
|-------------|-------------|
| 1 玉罎子 (T5) | 2 磁器 碗 (T6) |
| 3 磁器 皿 (T5) | 4 磁器 皿 (T1) |



トレンチ11 (南東から)

11 大谷地区（中尾遺跡）

調査地点	倉吉市大谷字中尾
調査期間	平成30年6月18日～6月29日
調査契機	大谷工業団地再整備事業（第3期）
調査面積	95.2m ²
調査概要	

調査地は、四王寺山から派生して南西～北東方向へ舌状に延びた丘陵上に位置する。現況は果樹園・畑地・草地である。なお、丘陵の東側先端部は平成2年度に試掘・確認調査を行ない黒曜石製ナイフ形石器を確認した。平成3年度に中尾遺跡発掘調査を行ない、落し穴84基、堅穴建物6棟、平地建物1棟、掘立柱建物8棟、古墳1基などを調査した。また、平成3年度中尾遺跡発掘調査地の西側は、平成7年度と平成26年度、平成27年度に試掘・確認調査を行なった。平成26年度～27年度は中尾遺跡第2次発掘調査を行ない、落し穴75基、堅穴建物19棟、掘立柱建物13棟、古墳1基な

どを調査した。

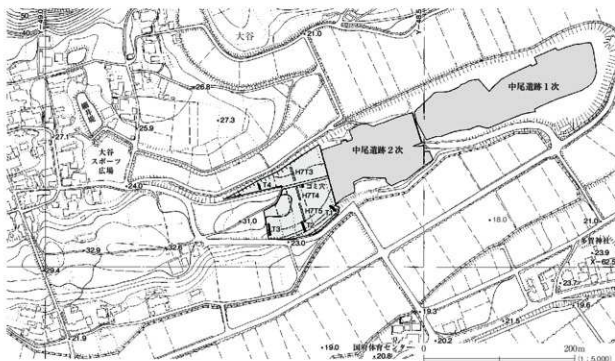
開発範囲は、平成7年度に一部試掘・確認調査済みで、周辺部と既存ゴミ穴を利用して調査した。

調査地の基本層序は、黒褐色土（表土）、黒色土（クロボク）、暗褐色土（漸移層）、褐色土（ソフトローム）、黄灰色砂質土（ホーキ火山砂層）、黄褐色砂質土（AT：始良丹沢火山砂層）、橙褐色粘質土（礫混じり粘質土層）、黄褐色土（D.K.P.：大山・倉吉軽石層）である。暗褐色土～橙褐色粘質土上面で遺構検出した。

調査の結果、遺物は弥生土器を中心に確認した。トレンチ1で丸瓦1点、トレンチ2では管玉未成品（緑色凝灰岩カ）が1点出土した。遺構はトレンチ2で堅穴建物、トレンチ3で中世墓、トレンチ4で落し穴、ゴミ穴で溝を確認した。開発予定範囲全域で発掘調査が必要である。

（加藤）

トレンチNo.	規模 (m)	面積 (m ²)	主な遺構	主な出土遺物
1	9.8×2.0	19.6	なし	弥生土器、土師器、土師質土器、布目瓦（丸瓦）
2	14.7×2.0	29.4	堅穴建物1	弥生土器、土師器、須恵器、管玉未成品、硯石
3	15.0×2.0	30.0	中世墓1	縄文土器、弥生土器、土師質土器
4	8.1×2.0	16.2	落し穴1	弥生土器
ゴミ穴	-	-	溝1	-





トレンチ 2 (北から)



トレンチ 3 (南から)



- | | | |
|------|----------------|-----------------|
| 出土遺物 | 1 縄文土器 深鉢 (T3) | 5 土師質土器 皿 (T3) |
| | 2 弥生土器 甕 (T1) | 6 布目瓦 (丸瓦) (T1) |
| | 3 弥生土器 高坏 (T2) | 7 管玉未成品 (T2) |
| | 4 須恵器 坏蓋 (T2) | |

12 小鴨地区（小鴨道祖神遺跡）

調査地点 倉吉市小鴨字鯉平、北野字タワノ上
 調査期間 平成30年11月13日～12月5日
 調査契機 国道313号（倉吉関金道路）改良工事
 調査面積 26m²
 調査概要

調査地は天神野台地の丘陵頂部に位置し、小鴨道祖神遺跡内に含まれる。県道を挟んで北西に隣接する地点では、平成29年度に鳥取県教育文化財団が行なった発掘調査で掘立柱建物が複数棟確認されている。調査地の現況は住宅の跡地である。開発予定地内にトレンチを2箇所設定し調査を行った。

調査の結果、トレンチ2の丘陵斜面東側、礫混じり粘質土層上でピットを検出した。埋土から8～9世紀代と思われる丹塗り土師器杯、奈良甕が出土した。これより東側は大きく削平されており、遺構は遺存していないと考えられるが、北及び西側には遺存している可能性がある。トレンチ1は礫混じり粘質土層より下層まで造成が及んでおり、遺構は確認されなかった。

以上のことから、開発に際してトレンチ2の周辺については事前に発掘調査が必要である。

（片岡）

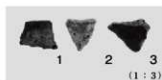
トレンチNo.	規模 (m)	面積 (m ²)	主な遺構	主な出土遺物
1	5.5×2	11	なし	土師器、丹塗り土師器、甕、横瓦、紙洋
2	5×3	15	ピット	土師器、丹塗り土師器、奈良甕、甕、青磁、横瓦



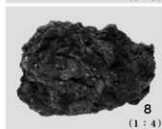
トレンチ 1 (南西から)



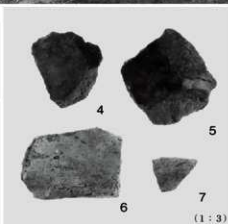
トレンチ 2 (南西から)



(1:3)



(1:4)



(1:3)



(1:5)

- | | | | |
|------|-----------------|----------|----------------|
| 出土遺物 | 1 丹塗り土師器 坏 (T2) | 4 甕 (T1) | 7 丹塗り土師器 (T1) |
| | 2 丹塗り土師器 (T2) | 5 甕 (T1) | 8 鉾澤 (T1) |
| | 3 奈良甕 (T2) | 6 甕 (T1) | 9 煙瓦 (棧瓦) (T1) |

報告書抄録

書 名	食古市内遺跡分布調査報告書第154集						
副 書 名	-						
巻 次	20						
シ リ ー ズ 名	食古市文化財調査報告書						
シ リ ー ズ 番 号	第154集						
編 著 者 名	加藤誠司・真田拓郎・小田芳弘・片岡啓介・宮田 幸						
編 集 機 関	食古市教育委員会						
所 在 地	〒682-8611 鳥取県食古市赤明722番地 TEL 0858-22-4419						
発 行 年 月 日	西暦2019年3月25日						
所 収 遺 跡 名	所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査趣旨
		市町村：遺跡記号					
大御堂庵寺跡 (松ヶ坪地区)	食古市駅前寺町2丁目	31203・6UDO	35°25'49"	133°50'19"	20170412～20170529	75	個人住宅敷地に伴う 本発掘調査
大御堂庵寺跡 (松ヶ坪地区)	食古市駅前寺町2丁目	31203・6UDO	35°25'49"	133°50'19"	20170412～20170628	63	食古市における各種 開発事業に伴う事前 の分布調査
旧食古町遺跡群 (旧飯田家住宅)	食古市東町長町	31203・	35°25'57"	133°49'11"	20170307～20170317 20170720～20170829 20181004～20181024	98	
下飯田後口野遺跡	食古市下飯田	31203・	35°26'16"	133°45'25"	20170411～20170418	22	
両長谷遺跡	食古市国府字両長谷・ 宇西麻布	31203・4DKR	35°26'36"	133°46'27"	20170807～20170914 20171218～20180323 20180613～20180725	820	
国分寺宮ノ峰遺跡	食古市国分寺字宮ノ峰	31203・	35°26'36"	133°46'27"	20180412	100	
旧食古町遺跡群 (小田氏庭園)	食古市両原町	31203・	35°25'44"	133°48'42"	20180524～20180615 20181112～20181210	241	
中尾遺跡	食古市大谷字中尾	31203・OSON	35°43'9"	133°79'55"	20180618～20180629	95.2	食古市小幡寺跡平・ 北野字テラノ王
小幡追分寺遺跡	食古市小幡寺跡平・ 北野字テラノ王	31203・6MOS	35°24'58"	133°47'36"	20181113～20181205	26	
所 収 遺 跡 名	種 類	主な時代：主な遺構		主な出土遺物		特 記 事 項	
大御堂庵寺跡 (松ヶ坪地区) ※本発掘調査	寺院	奈良以降：土壇1		布目瓦、縄文土器、弥生土器、須恵器、丹塗 り土師器、土師質土器、瓦質土器、陶磁器、 土師、鉄釘、銅銭（北宋銭）、埴輪、輪切、 銅沓、鉄沓、砂埴、磚、磁石、砥石、薄板、 銅像		跡造土壇の可能性のある土壇を検出。方形三 尊像や菩薩像面影、如來像彫刻、天部像衣 などの彫像といった大御堂庵寺の堂内荘厳 を示唆する遺物が出土した。	
大御堂庵寺跡 (松ヶ坪地区) ※試掘・確認調査	寺院	奈良以降：溝2、土壇1		布目瓦、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、 丹塗り土師器、土師質土器、瓦質土器、陶磁器、 土師、鉄釘、埴輪、輪切、銅沓、鉄沓、 砂埴、銅像		瓦や金属加工関連遺物が検出された大型土壇 を検出。	
旧食古町遺跡群 (旧飯田家住宅)	敷布地	近世：石列、土台石、三和土、堀塙		徳瓦、赤瓦、土師質土器、陶磁器、灯明皿、 銅銭（寛永通寶）、行文字、木札			
下飯田後口野遺跡	敷布地	時代不明：溝2		弥生土器、土師器			
両長谷遺跡	集落	縄文：落し穴1 弥生：聖穴建物3、土壇3、ピット1		縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、丹塗 り土師器、赤良土器、布目瓦（平瓦）、磨石			
国分寺宮ノ峰遺跡	集落	古墳：聖穴建物3、土壇1、ピット2		土師器			
旧食古町遺跡群 (小田氏庭園)	敷布地	近代：庭園		陶磁器、徳瓦、玉時子			
中尾遺跡	集落	縄文：落し穴1 弥生：聖穴建物1 中世：中世墓1 時代不明：溝1		縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土師 質土器、布目瓦、管玉本底品、砥石			
小幡追分寺遺跡	集落	中世：ピット1		土師器、丹塗り土師器、赤良土器、磨石、 徳瓦、銅沓			

倉吉市内遺跡分布調査報告書20

平成31年3月25日 印刷
平成31年3月25日 発行

編集 倉吉市教育委員会
発行

印刷 勝美印刷株式会社
製本
